江西省詳圖全

JL 4
3605
1

門 凡 4
秋 3605
色 1

東都名所圖

松濤軒長秋編次
花川雪旦圖畫

昭和十九 四月五日
故三上於菟吉氏旧蔵
三上参考文庫

都名所圖會始出遠在余成童時一閲之即謂此可以供卧游矣則江戸亦不可無是輯也滋數歲聞諸酉山大久保翁有齋藤幸雄者有探勝之癖方撰江戸名所畫會採擇稍遍描寫頗

志賀文庫

盡然獨病江戶稱名所者僅僅
不足傔指也余謂凡名所之稱
本出於咏歌者流蓋其設法謹
嚴畫一縱令本有山秀水麗足以
吟咏而其不為古歌所取者不
得稱之名所是其所以雖世有

汙隆要不失為雅馴也然名者
實也實者主也主豈可以賓加
損焉我朝秋里氏之撰非惟所
謂名所而已神祠佛寺說係怪
誕紊陌綺街肆事涉猥瑣者亦網
羅而不遺乎紛沒江戶之為地

武野之曠秩類之峻澶流之永
玉川之澄絡繹邦域靈關思密
之宜春真土菴崎之宜烝祫帶
郊坰其勝殆不讓上國乎是亦
何病之有翁頷而是之既而辜
雄沒翁亦尋逝終不知其成否

然而秋里氏所著拾遺輿咏河
泉攝及一二諸州名所圖會者
陸續上梓盛行於世余於是乎
悵然恨牽雄之輯愆期失時而
又聞其男幸孝善追其志再校
三索蒐聚滋廣猶未公於世幸

孝亦以文化戊寅沒又遺托之
男幸成幸成泣受之誦勉不怠
校讐極力竟竣其功閒者幸成
突然抵門通刺出其全帙示之
且需序言是蓋由余注日介人
促其成也余乃一閱三歎迟念

與酉山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄奉孝與酉山翁皆
不觀其完成矣然其所以歷年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
舉則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畜會之

撰固供卧游亦以寿示大方若夫覧者尤其不
雅馴則可謂不知類矣余更為
作者分疏其由云天保三年閏
月冠山松平定常撰

海内地名著於古人和歌者宗祇
澄月之徒攬而輯之稱之名曰山川
之險易風俗之淑慝名物之同異
可坐而識也吾江戸名所題於古人
和歌而晦於當今者不少矣多麿
川浦布著於延喜式霞関載於
武蔵風土記拠以

之僧西行之歌。皆名吟之顯於古
而今失其跡者也。及考古之士。
而訪之林鑿再啓其閥焉。泉石
每炫奇焉。然無勝情者則不
能也。蔡藤幸雄有勝情矣。看
徐具矣。江戸勝區名藪於榛
叢荒墟之冒。而不可識名。搜經
谷。披窮林或訪之古老。或徵之
斷碑。又自史傳地誌。諸書名所
和歌。紀行之書。以及稗說野乘。
苟有足以資考鏡者。必博採
綜括。闡發於著之繪事。收山河
萬象於掌端。亦可
為。其名吟。則著之詩。
於又幅。駈萬

以當卧遊矣。於是百年湮晦之
緣。區英雄百代之故處。名士彩如
之芳躅。粲然而復炫其奇矣。所
謂物不孤見。待人以章去駭
者。未及求索。重以疾而逝。識者
惜之。嗣子韋孝克纘先緒。補之
未備。余先人與韋孝締交已久

矣。嘗約為之序。而未果。享年不永。
亦繼而捐館。嗟夫韋孝胡為所稟
於性者厚。而所享於天者獨薄。
不稔痛惋也。及乞余求。能承遺誡
以一人而任二世之編纂。卷帙冗繁。
採掇亦博。而補輯悉審。契勘必
當。始克成斯浩瀚之編。乃韋脩

る人。逝去無憾矣。乃走不徴序於
余。叮云。余先人易簀。蓋八稔矣。而余
小薄技浪代先人之任。大方之誚。
固所不免也。天保癸巳春三月
江戸　龜田長梓謹識

牧野信之

ひつかぶのおてこのるふこうこと
のうはまゆくふつうまくいふ海あせくかそうゆくるたなおふ
しまあつぬをれあくぬれんん剛こそうていふきるさるる紅
るあこうをれ色ふれとそそ大塊のうふり人生はこそる九牛の
毛ひとつまよおよそすとういひとん流のくひまなん彩と
るるへきされをむこうようる名よきこえくるどころんくれ
おのつうちうなりゆきあるもうまつまく田と落と
哉々彩をなくふる市人のそみうとうはろひきねるす
なの地もあまるの世を色る後よいめく名そういむなう
跡れるとのうくあくぬれとてきねるようらのこ
まはうこと画すれくはくるんあるへきされ

あみくさの家居ほとりしく
慕ひせられ江戸ハまあ御代ふ
何くれとよ旅にかへる古き書
のうら傳ふ事ふとめおとかきつく
ゆる文政つりとし十まり二とせと
いふとし 松濤軒長秋しるす

凡例

凡此編の次序ハ大城を以て首とし餘ハ東方ふ回環する迄北斗七星の位ふ配當志て都て七巻を以て全部となす

凡江戸の地ハ廣大繁壮ふして名流高士の芳蹟ハ蔚然として史冊を照曜し琳宮梵刹ハ林の如く聯なりて悉く採へ挙るふ遑あらし故ふその中ふも由致あるを撰て録し或ハ傳記亡ひて證と志るへきなけれハ土人の口碑ふ存するものを取て證と志或ハ無根の浮説ふして言妖妄ふ渉るものハこれを省く然りと雖人口ふ膾炙して傳称の久しきものハ今強ちふ添刪評隲を加ふるふ能ハすして姑く其の侭を載す大伽藍と雖も東壁事実を亡失して詳かふ志る事能ハす且小祠叢祀の類新建勧請のものハ悉くこれを略きて好古博物の士ふ訪ひ他日後輯の成るふ及ひて附載せんと欲するのみ

凡方位を示すハ都位より備みて某の東西南北ハ在りと標注
又左右とハその地より其の地を指して標準とせよ
凡引用の書全文を載せずしてその綱要のみを撮るを主意と
摘るものハ紙負多きを厭ふ覧る人の意ハ主るのみ
凡神社佛閣の幅員方域を圖すハ覧る人の為今ハ形勢を
摸写ハ且地当の間ハ四時遊観の形勢を総ふ真態度
風俗服容儀ハ亦当今の形容を写も舊地ハ基て画ける

りの八各時と分てり是を地の風光と淵源して・地邦の人と
東都盛大の繁栄るを知らしめんが為のみ
凡此地名所の中武蔵野隅田川二帖を以て第一の勝槩とする故よ
隅田川ハ東岸ハ分ちて六七の二巻ハ記せり西岸ハ芙蓉峰白峰
雲間ハ鎌ヘ東岸ハ筑波の翠巒晩霞ハ薊ヘて山水の風致備りり
縦観の美ハ地ハ停まるハ依て去岸の全勢と瞬中ハ收んと欲せバ
ハ去巻と對照して全局と知るへし
凡真間の舊跡ハ下総の地ハ記して武蔵ハ記ハ
利根川を隔つるのみにしてといへども纔ハ
文人墨客吟筆を負ひて遊ハ於て
第一の壮観とせらるハ於て
ハ記ハ内ハ收む覧るハ

江戸名所圖會卷之一

天掘之部目録

武藏國號基　日本武尊移父裝倉ヒ小武器ヲ收ル圖
江戸始元　御城興基
元旦諸侯參城圖　吹上御庭
八代洲河岸　龍の口　常盤橋
淡路橋　大傳馬町　小舟町
天王町旅所　十軒店　同雛市
深世小路
福田村舊址　白雜物河岸
本銀町土手　今川橋　玉水井　鍛冶橋　駿河臺　紅葉山　吹上
護持院舊地　蔬圃　蠑螈橋　鍋田町　世繼橋　魚板橋　小川町　水道橋
田安基　藥土明神舊地　飯田町　中坂　九段坂

一石橋　八橋一覽圖　橋本の岸
通町　三井呉服店　大傳馬町　本町藥種店
本石町時の鐘　江戸橋　伊勢町堀の岸　同濱河岸
永代田村舊跡　永代田稻荷河岸
神田明神舊地　神田橋　淡路町通り　鍛冶町
小川町基ヒ　神田川
御茶の水

日本橋　同魚市
道三橋
梅林坂　平河天滿宮舊地

附言

大書ハ祖父ノ寛政中ニ編ミシテ父縣麻呂ノ刪補文化ノ末ニ及ビテ
カクテ文政ノ今ニ至リテ上梓ノ功ヲ終ヘネ凡年序ヲ經ルコト二千有余年
江都蕃昌ニ隨テ神社寺院境地沿革ナラヌノ類多シ一向ノ小祠モ
浪速ニ壯麗ナル大社ニ優ル莊嚴セラレルモノアリ況ヤ武ハ祝融ノ災ニ罹リテ樓門回廊ト燒失シ礎石ノミ
存セルノ類無慶校舉ナラシメ給リシ事ヲ改ムル能ハス
故ニ今時ノ雜ニ差ヘルノ多キヲ見ルノミアラムカ

齋藤月岑識

水道橋　駒込吉祥寺旧地
昌平橋　三崎稲荷祠
淡路坂　太田姫稲荷祠
藍染川　紺屋　瀬焼
稲荷河岸
柳橋　薬研堀
歌舞妓芝居　堺町中村座　葺屋町市村座
新大橋
根津権現　旅所旧地
兜塚
天満宮
伊雑太神宮
新川太神宮
恵比須稲荷社
於玉ヶ池　於玉稲荷
馬喰町馬場
両国橋
三派　別れの淵
中橋
永田馬場山王御旅所
俳仙其角翁宅地
三ッ橋
新川酒問屋図
湊稲荷社
駿河臺
神田川
辨慶橋　東瀬絵店
二
清水如水宅地　大門通
吉原町旧地
江戸橋　木更津河岸
天王御旅所　南伝馬町
同御祭礼の図
霊巌島　霊巌橋
永代橋
鉄炮洲
筋違橋　八ツ小路
丹後殿前
柳原封疆　柳森稲荷
浅草橋
杉森稲荷社
加茂真淵翁閑居地
四日市　土手蔵
鎧の渡　鎧の淵
茅場町薬師堂
徂徠先生居宅地
随見屋舗
薬師堂稲荷社
半井卜養翁居宅地

了然禅尼菴室地
江風山月楼
采女原　采女井
新橋
三
三縁山増上寺　本堂　三門
極楽橋　宗廟
円山
阿弥陀堂　大門
涅槃門　柵門
日比谷稲荷祠
真福寺
金地院　閻魔石像
西窪八幡宮
赤羽川
御穂神社
佃島　同白魚網
咳の爺婆
木挽町歌舞妓芝居
汐留橋
経堂　安国殿　御影堂　蓮花洲
御成門　弁才天祠
開山堂　六角塔　惟新院
鳥森稲荷社
愛宕山権現社
天徳寺
飯倉
赤羽橋
廉島神社
住吉明神社
寒橋
尾張町呉服店　恵比寿屋
織田有楽斎第宅地
飯倉神明宮
藪小路
愛宕山正月三日祭事之図
城山
熊野権現宮
心光院　布引観世音　行女投身　日親堂
毘沙門堂
鎧島
西本願寺
金六町
宇田川橋
産千代稲荷祠
桜川
青松寺　含海山
太田道灌城跡
勝手が原
芝浦
西應寺

三田　綱坂　産湯水　小山神明宮
春日明神社　月波樓　聖坂
功運寺　濟海寺　三田八幡宮
乘塚　迴棄先生墓　竹葉寺舊趾同古事
伊四子藥師堂　牛小屋　魚藍觀音堂　潮見坂
高輪大木戸　七月廿六日祭禮之事
高輪天祖社　如来寺　太子堂庚申堂
稲荷祠　泉岳寺　地藏堂
高山稻荷社　常光寺　寶冠寺　子安觀音　無量壽佛
東禪寺　有栖川宮　八幡宮　釈神社
谷山

武藏　東海道ノ屬ヲ和名類聚抄曰牟佐之國府多磨郡ヲ在ト云
武藏國上古ハ東山道ノ内ノ入ル光仁天皇ノ宝亀二年辛亥冬十月己卯
大政官奏シテ東海道ノ屬セリ續日本紀ヲ考ヘ
橘樹　荏原　豊島　足立　新座　入間　高麗　比企　横見　埼玉　大里　男衾
幡羅　榛澤　那珂　兒玉　賀美　秩父　葛餅等以上二十二郡アリ　拾芥抄ノ大縣東海
那珂等ノ三郡ヲ加ヘ葛飾ヲ除テ北四郡ト云ヘリ貞享三年丙寅三月利根川ノ
詳ナラス
西ヲ割ク武藏國ノ屬セシモ昔ハ本所葛西ノ辺浅草ノ川ヲ國界トシテ川ヨリ東ノ地ハ
一圓ノ下總國アリシヲ古ノ云ヘルヤウニ今ハ葛飾郡ノ半ヲ割ク利根川ノ以西ヲ武藏ノ國ト
葛餅郡ト云ヒ東ヲ下總ノ國ノ葛餅郡ト名ケ和名抄ニ武藏國管二十一トアリテ葛餅郡ヲ
今是ヲ加ヘテ二十二郡トセリ和名抄ニ多磨モ多波ト訓ヲ同書ニ多磨モ多波ト訓シ
古事記牟邪志ニ作ル舊文記胸刺ニ作ル萬葉集ニ牟邪志ト訓ヲ非ス
其義ハ風土記抄ノ武藏ノ國秩父ノ嶌ハソノ勢ヒ勇者ノ怒リ立ルヲ
ヤ一日本武尊此山ニ東夷征伐ノ祈願ヲコメタヒシヨリ後東夷盡ク平治
セシカハソノ武器ヲ秩父岩倉山ニ納メタマヒシヨリシカノ國ヲムサシト稱セシトナリ
後　称徳天皇ノ神護景雲二年武藏ノ國ヨリ白雉ヲ献ルヨシ公
卿ノ奏セシ言ニ武蔵ノ字ヲ以嘉名トシタマヒシヨリテ此國ヲ武蔵ノ字ヲ以書ケリ
續日本紀称徳紀云神護景雲二年六月癸巳云云武蔵國橘樹郡人飛鳥部吉志五百國於

日本武尊東夷征伐
の時武具伐秩父
岩倉山ニ收ム
是武藏國号の
濫觴なり

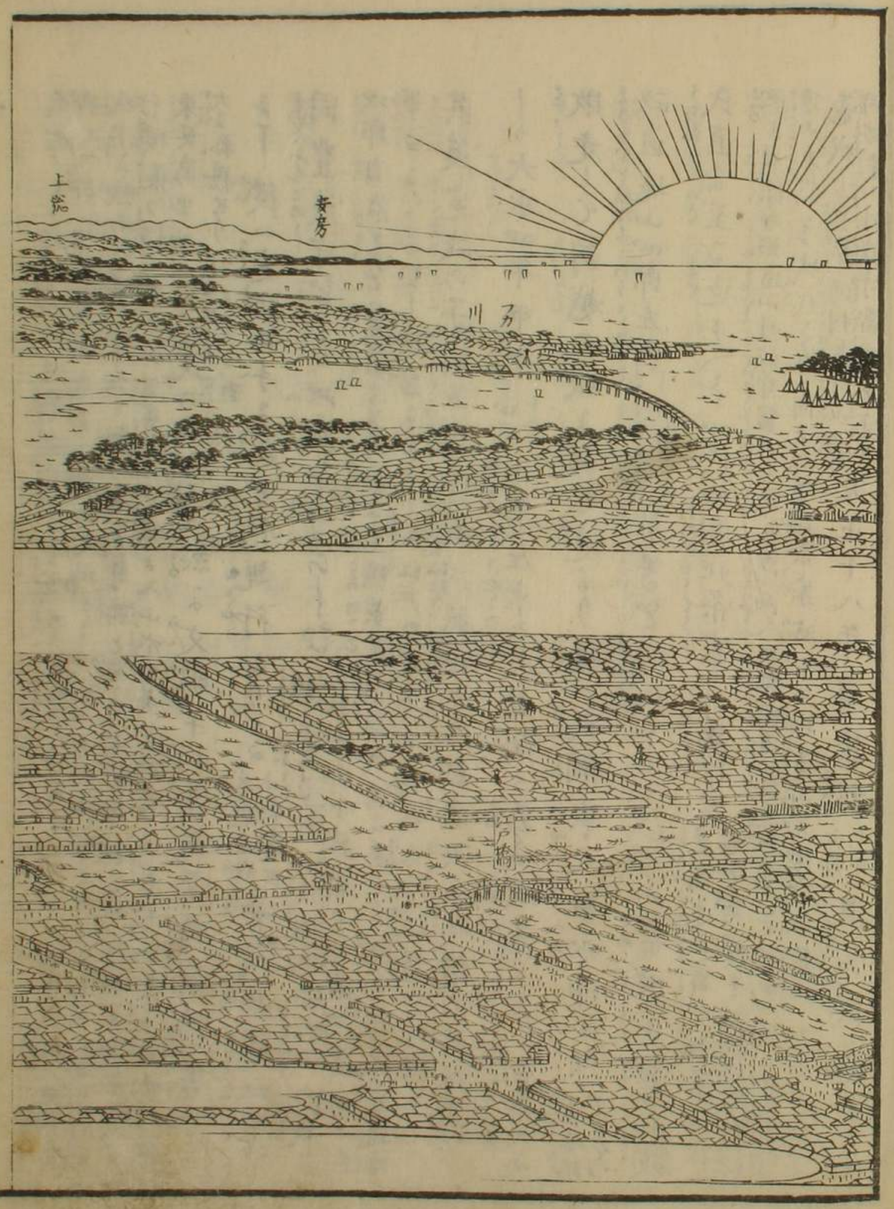
倭健戎容猛
征西又伐東
腰間十束劒
草薙偃威風
春齋子

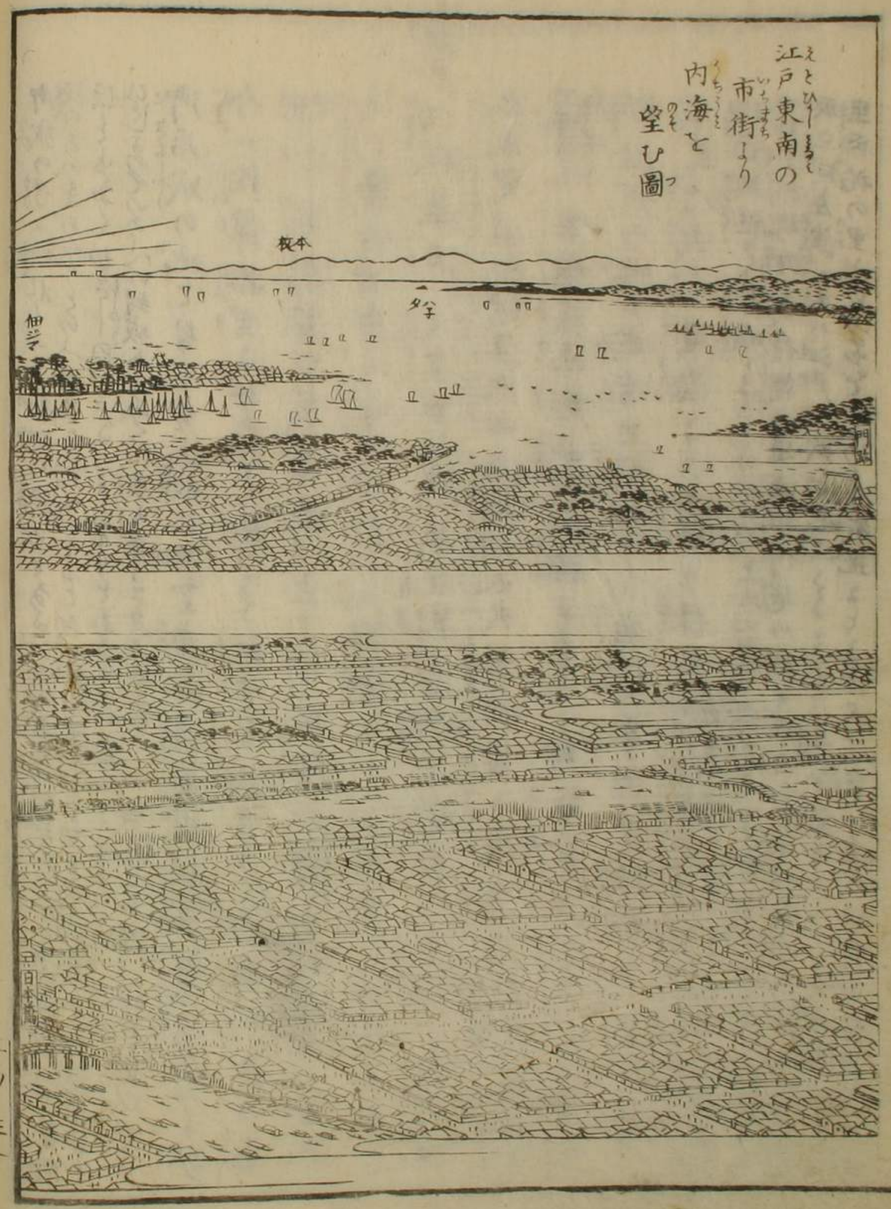
同國久良郡獲白雉献焉即下郡郷議之奏云雉者斯良臣一心忠真之應
白色乃聖朝重光照臨之祥國号武蔵既呈戴武崇文祥とあるハ
年邪志の三字を好字ニ改め二字ニ定め武蔵と書て志の文字を畧れ
しより此白雉の瑞ふつゑ武蔵の二字を祝して奏しる詞より今の名ありもとこれり
東照宮様當國ニ大城を構え鴻業の基を開さゐひしより
四海竟ニ干戈の労を忘れ万民長ニ太平の化ニ浴もるゝを乃是
天意のあら〳〵むる所ゆゑて國の隣も自ら昇平の御代ニ應しくるゝ
家集　拘名むさし

枝ながらむさしを分よあしの葉の遠くそとへとそおもふ　権本入丸

江戸　豊嶋郡峡田領とし其封境往古ハ廣くありしに似たり
白石先生の説ニ江戸ハ庄の名ありて云々按ニ中古庄と唱へし郷のすをいふなるへし
郷里共ニ佐登と訓を今義解云々九五十戸為里と云く然る時ハ佐ハ狭登ハ処の畧ふ
して廣大なるの意ふ武蔵國風土記ニ荏土ふ作る傳云此地ハ大江ニ臨
とりしく云々しかれ　甲陽軍鑑ニ江戸の辺ニを中武蔵と唱へしとあり義
故ふ江戸と称せりとの経記ニ云く江戸太郎重長ハ葛國の大福長者とあり
ある時ハ江戸の地ハ千頃ありしを開て今の三の丸の地ハ江戸の郷日輪寺の方ハ神田郷
飯田町の下よりつゝく入堀の水脈ハ江戸とそゝへし地なりと又同一説ニ今の御城の
迹をいふへし江戸とそゝへし地なりと根州大坂御城内の雁木坂旧名を大坂と号く後世
御城の号ニより彼地の惣名とする江戸の名も此類なるへし云云寛永二十年開
板のあつまめくりとの冊子ニ江戸の惣名の葉未みむもへ浅草を打越のけて
ほとゝもめくむさしの江戸よつゝくふ廣大なるをいふとありても上の意ニ
ひとしてそのあへの封域今のめくふ廣大なるをいふへし　天正己降江戸を以て
御居城の地となしゝより故ふ日を重ね月を追ひ益繁昌ふおよひ
今ハ往復拾里よ外ゝむて都ゝ江戸と称せり　萬國列侯の藩
邸市廛商賈の家屋鱗差して縦横四衢ニ充満して万戸
千門甍を連ねり実ふ海陸の大都會ゆゑ扶桑第一の名境とゝいへし

江戸大城基立　人皇百三代後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理
大夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道灌
の条下ふ詳なり　當國荏原郡品川の館ニありし時勝地ゝる旨を以ゝく豊島
郡江戸の地ニ城営を開むとして康正二年丙子経始して長禄元年
丁丑巧成ゝく道灌ゝよ移り住を
持資相継ゝく居城とすとの
四月上杉修理大夫持朝入道武州河越の城を取立らるゝとありて
取立同左衛門太夫ハ江戸の城を取立
宝田祝の里とりの石をとりゝく城地まとると又一説ニ千代田吞田宝田等の三





江戸東南の市街より内海を望ひ圖

氏をして武州江戸河越岩付等の城塁を築かしむとありて一説に或ハ地名とし或ハ人名とせり大道寺友山翁云天正より以来ハ千代田城と申すると云々其昔持資城中に燕所の室をかまへ軒の南を静勝と号し東を泊船と呼び西を含雪と唱ふその頃灌の揮に應じて万里居士江戸城に入山水の美を眺望し窓含西嶺千秋雪門繋東呉萬里船といふ古人の詩を引て大に称揚せり於此地の美景ハ江亭記の文中に詳なり然に文明十八年丙午持資讒害せらるまし後ハ定政の手に属を依執行なりける武蔵志料不執支旺曽我兵庫頭の子同豊後守をして此城を守らしむ鎌倉大草紙に文明九年江戸の城に上杉刑部少輔朝昌三浦助義同千葉次郎自胤等を篭置とあり按に其頃長尾景春武州にありて兵を催し太田道灌戦ふにいとまなし鎌倉にありし扇谷江戸の城にハ是等の人を籠置しかるべし其後定政の子同五郎朝良同修理太夫朝興共に相續て此城に拠りしか大永四年甲申正月十三日北条左京太夫氏綱か為に攻落され朝興大に敗走して河越の城に移る是より後ハ氏綱家人冨永神四郎小田原記四郎左衛門政直遠山四郎左衛門小田原記四郎兵衛某等を城代としてこれに篭置氏康氏政氏直に至る迄すべて四代の間北条家に属す是間遠山冨永両家より代々城を衛護す諸城並城代記に丹波守直景城代とあり遠山然に永禄の始遠山丹波守冨永三郎左衛門両人北條國府臺に戦死して天正の頃ハ北条治部少遠山左衛門等城代より同十八年北条家滅亡の頃遠山左衛門佐景政を小田原に籠城し其弟河村兵部少輔同甥遠山丹波守當城を守る天正十八年庚寅秋七月十二日其家没落せし

より己来永く御當家の御居城と定させられ同年八月朔日江戸の大城へ台駕を移させ給ふ其頃迄ハ僅かりの城営なりしを慶長年間御城廓の地を廣めさせたまひ唯今のごとく巍々然として萬世不易の大城とハなりける

江亭記

寄題江戸城静勝軒詩序

武州江戸城者太田左金吾道潅源公所肇築也自
關以東與公差肩着鮮矣固一世之雄也威愛相兼
風流籍甚比來驟亂以来欽兼王命者八州內才三
州三州之安危係于武之一州武之安危係于公之
一城可謂二十四郡唯一人夫城之爲地海陸之饒
舟車之會他州與郡藪以加焉壘之高十餘文懸崖
峭立固以繚垣者數十里許外有巨溝湊塹咸徹泉
脉瀰以鄰碧架巨材爲之搗以爲出入之備而鐵其
門石其墻磴其徑左盤右紆聿升其壘公之軒峙其
中閣踞其後直舍巽其側成樓保障庫庾厩廠之屬
爲屋者若于西望則逾原野而雪嶺界天如三萬文
白玉屛風者東視則阻墟落而瀛海蘸天如三萬頃
碧瑠璃田者南嚮則浩乎原野寛舒廣衍平蕪茵布
一目十里野與海接海與天連者是皆公几案開一

元日諸矢
登城之圖

藩邦土帛此朝宗
關險何須百二重
四海道通咨渤澥
中原嶽秀有芙蓉
城地日暖晴雲遍
郎第春分淑景從
回望蘭葱佳氣裡
車如流水馬如龍

服元喬

物斯萬凡月背其南叢驄之三狀拍斯几則一日之南名靜
耳以斯月之出而沒日合之餌室矣則氣窮躁不躁於缺公
故遊拍斯三晦其南叢驄之旗々於入可兮皎焉如東瀛着
軒之則几可一翫早着雖午晚互之與勝東名一年泊舩西
南名靜勝東與一年泊舩西名一年春夏秋名含雪公息態
含着與公缺於躁不躁窮氣則矣室餌之合出而其背凡月
雪也公之非一能缺勝之神清慮收之旗々於入可兮皎焉
泊其相以盈偏勝盈寒域與着其天衆旄々於入可兮皎焉
舩不爭所非而寒而靜則氣成躁地無騎成竹市樹烟旅地
着知而守冲非而不勝雖合歌而人不卒市泉則烟旅地紫
浣爲相扁而其不冲熱思而詞失以稟聚之房雲大之迄之
花着戰於後正能譬清神太和常爲聚之房雲大之迄之霞
芜咸着軒無也勝如淨弗清者矣吾區珠之之小所而所之
人謂未不所唯熱躁爲克爲成扛有別犀米際之獻腴與絢
蜀公之翅不泊靜之天測與政户題者異常到風也田也如
中之有勝勝然能不下其元化瞑哉人杳之高帆城旁遠南
倦風也熱可清勝能正機氣然目於之至茶橋漁之環而野
遊愛所無以淨熱靜蕪也爲後厚是所鹽信下獵東陂水波
之能謂所爲不而靜灣矣馬乃養乎賴魚之繫來畔水波風
境傳可不天添不之城青道定弗懼也漆銅纜去有常曙之
題人以勝下於能不解牛遙其已其於臬越閣之河足兮颯
扁忻爲則正一勝能之真於神發搖呼危之擢夜其某島如
所懼天宇矣非寒躁曰人玄乃之而不筋竹鱗舊流林嶼西
及矣下宙今成皆耳成有々寧於散出勝箭集隱曲可分崴
而如正間也非滯夫而曰無其言正此藥相蛾見折蕉鴉秋

以松村菴翁由幼至老鴻名藻片章被於天下其名謚傳盖者六十餘年於此矣是以人請公欲需翁題詩其上者言之翁告予曰我未嘗及屬能之述以予得掛一辭幸賁于所目擊以序之詩與跋以序之詩與跋以此地同此景摘以爲名在公乃吟中一風流尔聽扶菴靈彦閒野閒青丘吞蒂
傳聞靜勝軒中景四面寫扉一々閒野閒青丘吞蒂
樹來我光無期泊舩憂關心西嶺成堆堀景蓧多少載詩
兵鼓聲中築受降聞君延客日臨牕風帆
玉吹雪士峯晴墮江君延客日臨牕風帆
籍々威名關以東又知天下有英雄鼓鞴不起遑城
靜驅使江山入敷中補菴景三州富士天邊
江户城高不可攀我公豪氣甲東關三
雪收作青油幕下山
雲連雪嶺水連吳城上軒窻閒畫圖最愛似留行地
日碧天低野入平蕪

古今壯遊之士有志於四方者必以經歷關左山東之地為先爲凡遊關左者必以見富士山過武蔵野渡隅田河登筑波山則皆誇四方觀遊之美也予壯年之時跂而望之然今耄矣遂初志者百不蔑一以是為恨項閒太田左金吾源公者關左之豪英也守武州江戶城而有功於國矣盖武之為州也以用武為名甲兵四十萬應卒如響乃山東之名邦也江戶之城於是乎在雄據其要而堅備其壘所以一人當險萬虜不進亦乃武州之名城也刎夫此城最鍾勝景寔天下之所稀也聘睨之隙隨地形勢彼有樓館此有臺榭特置一軒扁曰静勝之軒是爲其甲也亭曰泊舩齋曰含雪各其附庸也若其憑軒燕座回瞻四面則西北有富士山有武蔵野東南有隅田河有筑波山此乃四方之觀在此一城也而一城之勝又在此一軒也繇是四方有志之士不欲役遠遊俱願一登此城到此軒者亦其理之當然也而今金吾公託其客之西上者求京師諸人之題詠而將藁飾其軒楣閒之詩技也得命同題者及予五人然此五人之中東遊鄒壓其地者惟統正宗一人而已故以序屬正宗具陳于前告不知者如往觀爲於是就予以求后題不肯拒辭輙用所聞於正宗之說而附于篇未且役傳語金吾公雖予耄矣之役而跋望之志尚在爲文明八年龍集丙申八月初吉書于岩栖之村菴希世靈彥

寄題左金吾源大夫江亭

士嶺衡天東海瀾
静中勝景畫中看
一由旬雪梅花鵬
載泊前灣晩照殘
湘山暮樵得公

華構臨江天宇低
北帆南楫日斜西
髩端雪白漁竿客
萬頃玻瓈可釣齋
武陵興德

華館相彼主亦賢
江亭兹試武城絃
東虔浸戶波黏地
西嶺當窓雪界天
珠履三千門下客
玉樓十二洞中仙
憑誰說與蘓夫子
赤壁休誇前後篇
相陽中榮

士嶺之東湘水北
一亭新架有高城
閭閻撲地育民厥
經籍滿床羅俊英
鷗渚鷺汀春晝静
竹籬茅舍暮光晴
丹青難畫戰圖外
帷幄運籌張氏情
河陽東御

左金吾源大夫江亭記

關左形勝之雄以武為冠武著大國也其山木奇傑而兼要發者江戶其武之冠乎距相府連模可百里爲綠燕白沙並海以北玉簪之山羅帶之水跂涉忘勃而不覺日之將晚也翠壁丹崖屹然以高峙珍卉佳木蔚然而中秀延左金吾公源大夫之所築新城也攀以躋爲俯以臨爲四面斗絶直下百文東南佳山水歷々以在杖屐之下南顧則品川之流溶々漾々以淼碧人家鱗差乎北南而白擒紅樓鶴立暈飛以翼然乎其中東武之一都會有揚一益二之亞称

也東望則平川縹緲兮長堤綫迴水石瑰偉兮佳氣
鬱芬謂之淺草濱白花大士遊化之場巨殿寶坊輪
奐以掩映乎數十里瀛補洛妙境神人所幻云其後
則滄洲茫乎百川與海會呉楚東南圻乾坤日夜旁
即此乎其前則谷岩出没而原野莽蒼天壍之幾多
仍一夫當關最百万不可以近世乃知此地面勢實
一方金湯之于而無所與二也胥周室中微有諸侯
患仲山甫城敵東方國人安以集也宜王大與爲公
柵於斯外扼與之喉襟内擽武府之榱肯東民賴之
公之功可謂蓋仲山甫顔行者城上置間燕之室扁
日静勝静勝芙兵家之機齋乎當其西簷而有富士
峯之雪天則水蒙以玉立三萬餘文以窻曰合雪也
梵南檻則削鬟涵天沙脊而吐洪朝陰出縮于曉夕
羣山隔疊積鷗梳洗濃翠含隠見于雜晴自然無軸
之盡也皃雲汀漁家民屋枕耤以雜處沙戸水舵
人朴地清旅舩之所泊也青龍亦雀舳艫相衛蘭棹
桂棊桐經舫緯如織而款乃聲無斷也江情湖思
寔欒矣哉締小亭驗泊之摘字於院花詩史其人於
襟宇潚措意於鳴雅域之語而可以知韻已歎
是湘中即以詩寄其者弗慕鶴公之遂而哉而
羨其山之美以於詩志或蓮琳琅其音玲瓏忘
成章余寓錚々重餘魚金入珠燕石濫璨非者
也公之之鬣也於響目而見命余扑而野以
文何之有邪然晉責以言書無地辭嬖鉈集朽以
聊且檠記其景象之曼乙而云尔焉文明丙申秋之
秋也湘山暮樵得幺

文明六年六月十七日江戸城にて道灌哥合を興行すこれを江戸哥合と呼へり其人〻はいはく

心敬　資雄　平盛　音誉　道灌　珠阿　孝範

資俊　好継　快兼　卜巌　資常　宗信　瑞泉坊

恵仲　資忠　長治

以上十七人判者ハ心敬僧都講師ハ平盛なり

孝範家集　二月十三日より聖廟法楽とて静勝軒（太田道灌）にて一續ありしに梅の盛

うちくとき色香も見ぬ梅の香をつかさとる春の心反　孝範

宗長東土産　むかし江戸中務なる人ありて江戸の館に六七日逗留す抑連歌三百韻あり

霜さむき松陰く田鶴乃鳴くこの那
遠山千とせ雪は朝戸の窓　上杉 建芳

雪も今朝みな消えつるこれかな
一日て面白かりし會席なりと云々

我庵は松原つゞき海ちかく富士の高根を軒端にぞ見る　道灌

此和歌ハ太田道灌静勝軒の含雪亭にありて詠じたると云

旧日天氣よろこく江戸の城ふ
はるゝ遠山甲斐守手一人を
つかわれ難なく先旅宿の事云付られこゝろまてふ亭主
宗三とそ和泉堺尼あれハ時宜ふやせ〳〵城より使明後日
上總國へ出陣のよし侍るともむりふ一座慰望けり色〳〵
故障めいわくの由再往なまてとも不及了簡ありけれハせんなく
昼ハかくのごとく始られよう〳〵杯十そ一順の為とそ盃も取あへす

玉ゆらに花ふきおろし
此城の遠望下ふハ運籌帷幄中決勝千里外ことわりを
いのる〳〵ゆく秋〳〵もろ〳〵ありて又六日太田越前守無紛のよし
中来まろこまハ小田原あその為約を十なろ〳〵をそに
明日息弥を斉出陣あまこハ夜討さそ仕〳〵哉仕をともも
連歌のこゝろハ数句のよふ〳〵ふ地よいます

花ふゝむ彩霞ふくむ色こゝろ

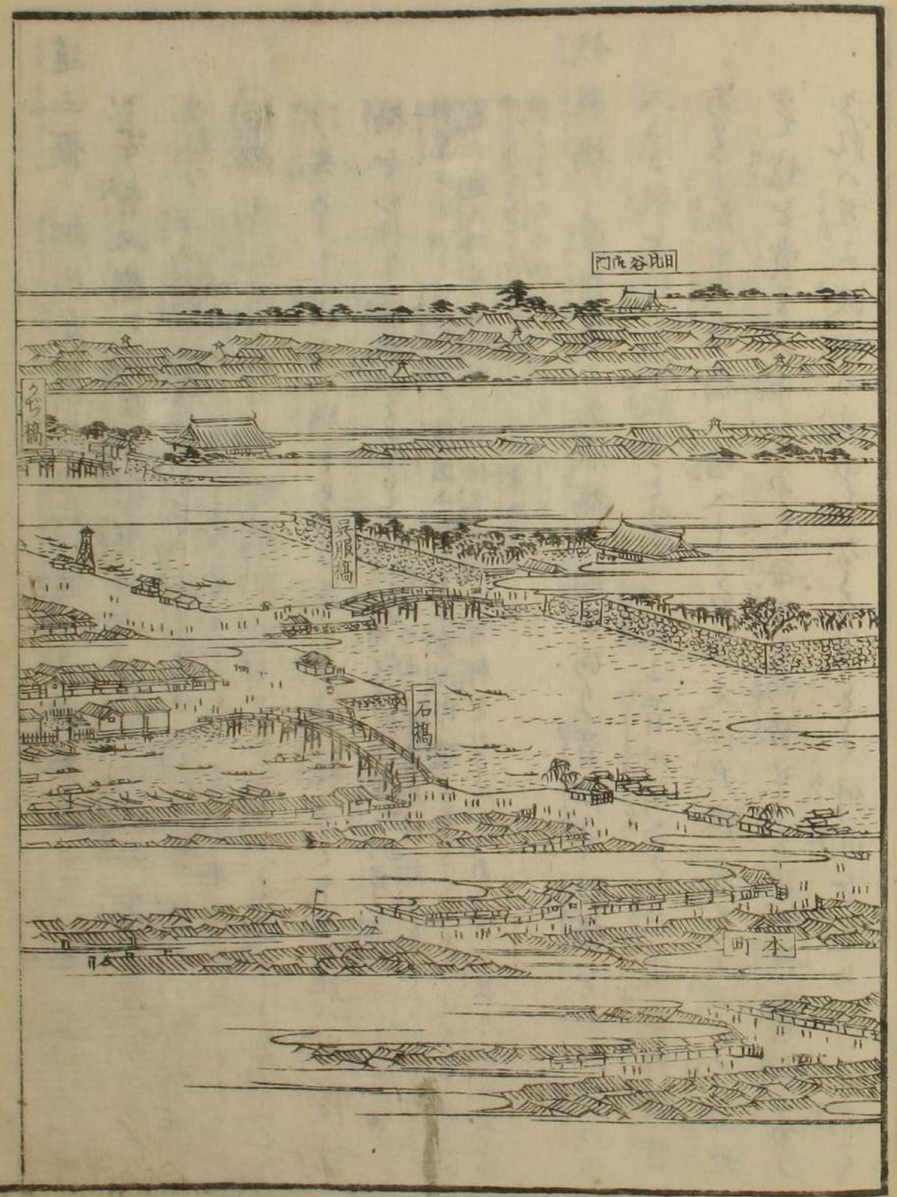
そえたるまく〳〵なるへし一座をとくをそこゝろふ盃をく弥太郎
出陣をもの〳〵連歌のこゝろそのよろこくそうそ出ばるく舎弟西堂の
えさりかたく例の酩酊このかた〳〵さふ富士見の亭一見を
ゆ〳〵とやわれハ富永とゝへ會席よりたゝれくまく秋
くるほとのありあまた又小田原より為ふ何らまとる
るあるく掃除なとれ迎の岡松のくもりとあく
入江かけるなつさ〳〵を引ふおりまとみちくるひろ巻
思ひ男山こゝろ残やをけなく暮そくれハ富士もとゝ
おりけさふ中雲なりふ武蔵野の眺望まふ
ほと〳〵ふへ〳〵東の矢く〳〵又荒玖波山の亭とゝ遠浦
帰帆おさ〳〵聖をもるるとみ〳〵さ〳〵のほる
夕月夜盃ふうつり〳〵ハ

国ゝもろ〳〵ひろ〳〵白雲のそこまふ山をあ〳〵の秋

吸出陣又を守へ詠進～かくそ各異見の事ふ
てそかそを忌まそり七日もそそらきれ軍勢ありせ
はそふそ云そ
始二四日とあるハ天文
十四年三月なり
吹上御庭　旧名を菖澤と云
按ふ吹上とハ江河ふ臨めり高き地と云
あり又江戸小石川水川明神の南の辺武州荏原郡
めるをもあるそ古名を吹上とのこしかと小石川の水流の低そ
松原小路　田安御門の内なり相州藤澤の辺武州鳴瀬の辺ふ皆此名あり
御舘を建られて木立の御舘と呼そ昔此地松原ありしを結城黄門公
せ～和奇よりくある名つけそと
ありしとあり依て考ふるに覚永九年の江戸図ふ今の代官町
國師やしきと記してあり～なくへ
そもこれ歟置してあり～
梅林坂　平川口御門の内ふあそ文明十年の夏太田持資或日一室ふ
ありく午睡の中霊夢を感し翌日菅公親筆の画像を得てこよ
勧請し梅樹数百株を栽依く梅林坂の号ありと云
平川町よりある平川天満宮是なり菅神の宮ハ今裏町
初平川天神の条下ふつくへ三巻の
平河ハ往古上下と呼そ川

八代曽河岸　和田倉御門
汲打際ゆく漁者の住家
看店多き町屋とそなりしかと其後日比谷町と云て
異國人ふ此地をもつそ
慶長の頃ヤンヤウスハチクロンとの、浜
名所図会ふ重教ふ作ると又江戸雀ふハ連州とし
第一本ふ三ふ作ると又江戸砂子浴容子ふ書
陀人来る事監合考ふハ弥養子
或人云慶長十九年甲寅九月一日阿蘭
作ると云ふ又一書ふ耶揚子ハ吉利支丹
揚子ハ吉利支丹
御制禁の事監合考ふ云日比谷町ハ芝口へ
柳営よりもると云ふ又一書ふ耶
迄されし看屋のありしと云ふ又一書ふ耶揚子ハ吉利支丹
歟人
不ありしとうふ新看町是なり又称左伝ふ町畳町杯云も同し
橋の新看町是なり
と云ふ今八丁堀ふ日比谷町と云あり是も地より
名を内町と唱ふるも御城内の町とふ古俗の号
龍の口　和田倉御門の東御濠の餘水を落す此所迫潮さし入あそ
昔此辺を平田村といひしと云同所南の角松平右京兆弟宅
の内ふ平田明神の社あそ祭神詳ならず今ハ又此地其昔を蒲生
稲荷を勧請す
飛驒守氏郷の宅地なりと云伝ふ
竜の口ふ虎の門梅林坂竹橋是を合せて営中の龍虎梅竹と称しあくり

赤坂の浄土寺
昔ハ此地よりしとうふ寺

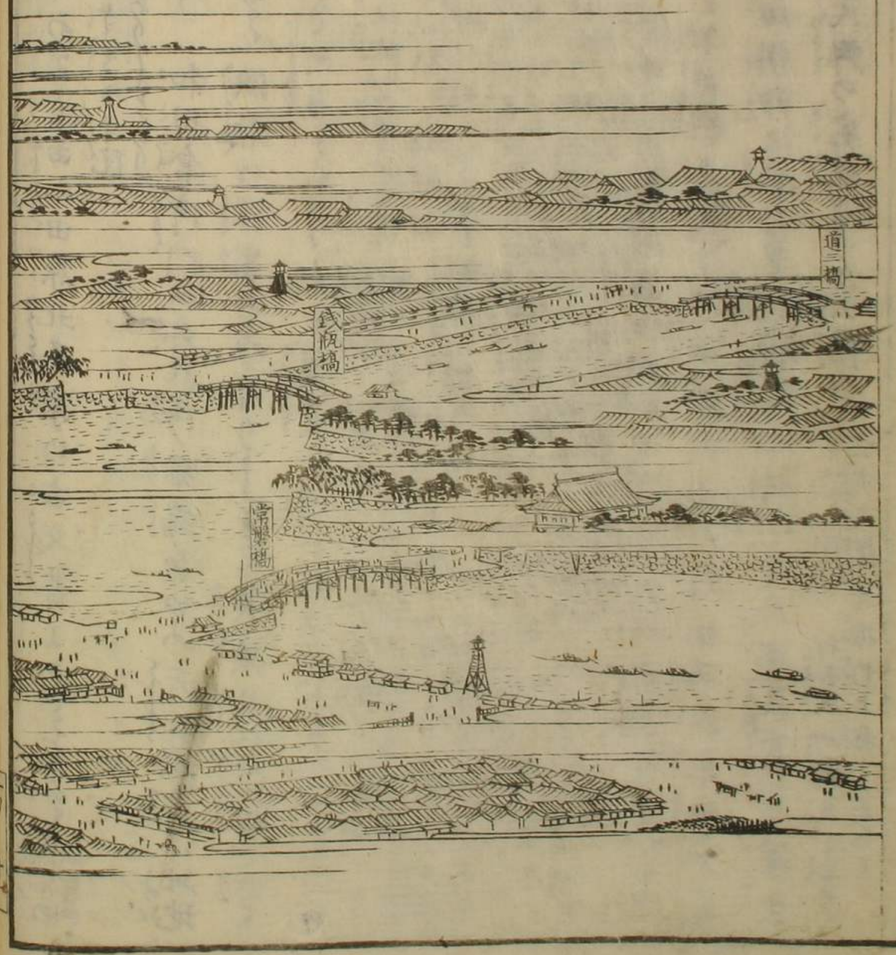


八見橋

一石橋の異名
あり此橋上より
眺望もれそ

常盤橋
銭瓶橋
道三橋
呉服橋
日本橋
江戸橋
鍛冶橋

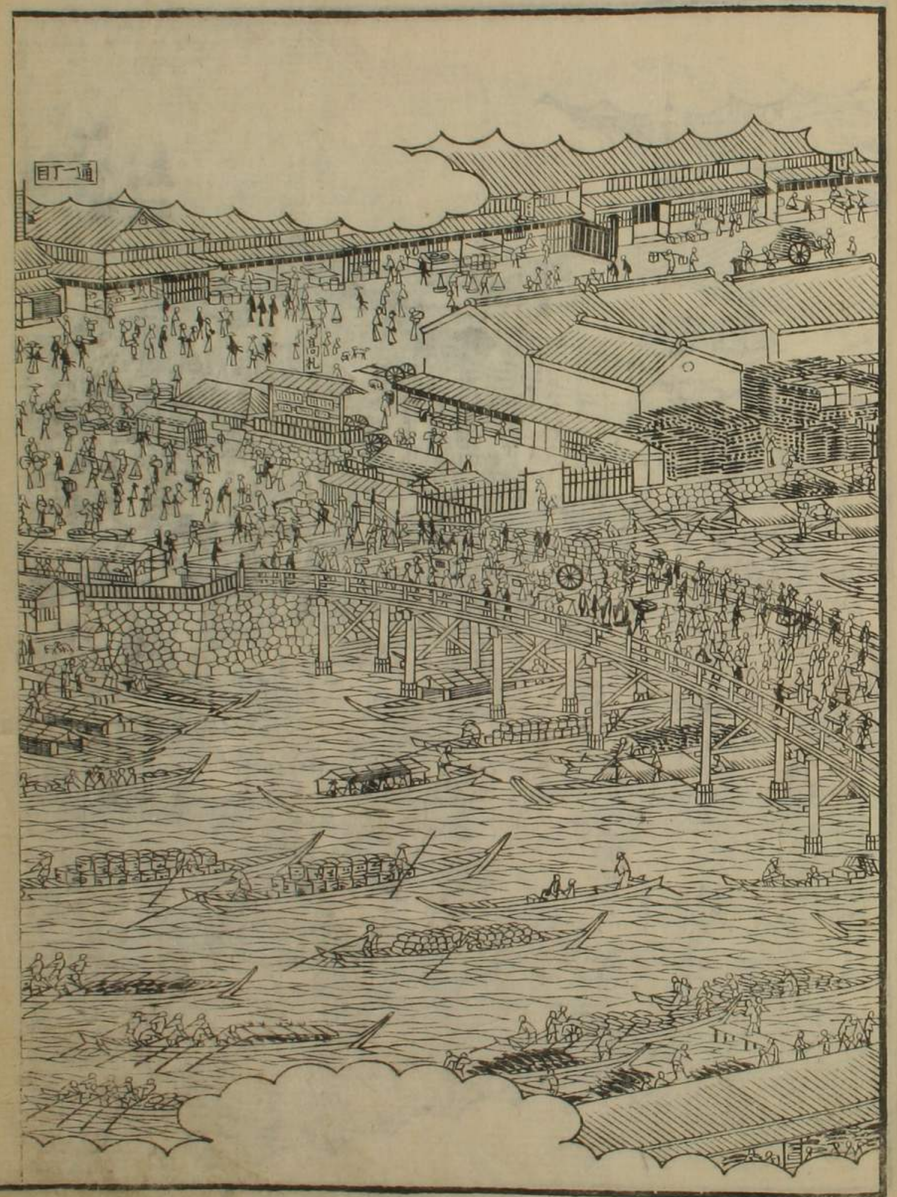
一石橋と加へて
八見橋と云ふ
日本橋と江戸橋
の図ハ次の丁を
ひらくべし



道三橋　細川矦藩邸の北の通より常盤橋の方へ渡る橋の号
とす昔此橋の南よ典薬寮の御醫官今大路家の弟宅あり
故ゝ此あを道三河岸とよべり延宝図よ内河岸とあり慶長の頃ハ柳町と
云一柳城下町なりしとき慶長十二年の図よ町屋とのミ記してあり
俗間傳云ふる時大将軍家道三をめさるゝ比遠しとや工ろれハ
江戸名所
図会
此あたり其道遠しと云ふるとも
住宅もと云ふ寛文江戸繪図よ此あたり道三河岸南北とあり道三
翁云道三河岸御入國の頃材木渡世の者軒をならべ住ゐ医術の面ゝ本道外科針立灸まと軒をならべ
やきとありしとぞ故ゝ城の外東の方へ後ゝ城の内へ引入たるとぞ今の本材木町是なりと云ふる
橋をかけしめらるゝとなり又大道寺支山
銭瓶橋　常盤橋と呉服橋の間よひり昔初ゝ此橋を架し時銭の
入ふる瓶を堀得しゝ故号とすと一説よ昔此所あゝ永楽銭の引替
あるしゝ故ふ銭替橋と唱へしとぞ又江戸總鹿子よ云ゝ昔此地
ゟ銭を賣るの市をひらき毎日よ両替せしふ後ハ銭賣多くあり
これハ互よ渡世の為めをなるゝとゝゝ仲間を定めける依ゝ

其頃銭買そしと云ふるとも云云
江戸鹿子江戸雀等の冊子よ銭亀
寛永十八年印本をろゝの語とひつふる者銭瓶橋の辺よ洗湯風呂を一ツ立る風呂銭ハ永乐一銭なりとあるとハ
橋と作
銭瓶橋ゟ伝ふしと
常盤橋　御本丸の大手より東の方本町への出口やゝく御門あるとゝ
橋の東詰北の方ふ御高札をおし建らる金葉集ふそかへぬ松ひ
よるゝくあつまの後の常盤の橋よかゝる蘇波といふる古哥の
意を松平の御称号よとりまつへ御代を賀しまりての号ありとぞ
按よ此橋の旧名を大橋といひしハ誤なり慶長十二年の江戸繪
図ふ今の御本丸の下乗橋を大橋と号ふ同図ふ常盤橋をハ
浅草口橋とろゝせり依ゝ

一石橋　日本橋より二丁斗西の方同ゝ川筋よかゝる此橋の南北よ
後藤氏両家金座後藤庄三郎
呉服所後藤縫殿助
の宅あり故ふ其昔五斗ゝくとらゐ秀
句ゆゝく俗よ一石橋と号けしとぞ
寛永の江戸繪図よハ後藤橋ゟ
あり斗の音トウなり項ハ五斗と
云ふるとも
又此橋上より日本橋江戸橋
呉服橋銭瓶橋道三橋常盤



日本橋

自是太平無事客
東関行盡幾山川
武江城上慶雲靜
日本橋頭人氣煽
翠帶紅衣常絡繹
玉鞍金轡每駢闐
相如題柱知何意
冨貴従来元在天

山崎闇斎

にほんばし
日本橋
うおいち
魚市

橋鍛冶橋等を顧望する故ふ此一石橋を加へて共に八橋と云
（此橋の南詰東の方へ行河岸を檜木河岸ともいふ又菱垣廻船向屋多く住る故ふ檜木向屋外諸方への舟宿多し）
南北へ架す長凡二十八間南の橋詰西の方に御高札を建
らる欄檻葱宝珠の銘よ萬治元年戊戌九月造立と鐫す此
橋を日本橋とハ旭日東海を照るを親見る故ふ号ると
いへり事蹟合考よ云日本橋の名ハ慶長十七年の後歟とあり又其
考へを記せり（按ずるに北条五代記永楽銭制禁のことを記せし条下よ
慶長十一午のとし極月八日武州江戸日本橋よ高札を此地ハ江戸の中央
建るとある時ハ慶長十七年より以前なりとおぼし）
して諸方への行程も此橋より定めむ橋上の往来ハ貴となく
賤となく絡繹として間断なし又橋下を漕つゝ魚船の
出入旦より暮よ至る迄嗷々として囂し（北の橋詰を室町一丁目と
号く此町の異名を尼店と
尼崎屋又右衛門の店よ年々四月十月の
繻袢の初売ありて其日ハ荷馬の装束をおくるゝ事例の如し
小路を品川町裏河岸と号く釘鉄物の店多し其西ハ横
町魚家あり日毎よ市を立る
魚市
船町小田原町安針町等の間悉く鮮魚の肆あり遠近の
浦々より海陸のけものも鳥なく鱗魚をこゝよ運送して日夜ふ
市を立て甚賑へり

笈の小文

芭蕉

伏角

祇園會の河原

大傳馬町二丁目の乾の角よあり（此所ハ側共よ呉服物の
両替す此街よ年々四月十月の十九日の夜ハ其宮所ハ神田明神の
懸藏の儀とて魚の形を立くさ〻を飾くる）
地よおりて祭神ハ五男三女なり（是を八王子と称す）毎歳六月五日本社
よりこゝよ神幸ありて同八日帰輿を又小船町を旅所とする
をの日同十日ふ神幸あり同十三日帰社あり是も宮居を神田
明神の社地よありて祭る神ハ奇稲田姫ゆゑ是を本所前と
称せり何事も旅所よ迂幸の間ハ日夜恭詣群集して一時の
賑ひなり

通町

北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

駿河町
三井呉服店

呉服物品々

越後屋

本町
藥種店
壹番
貳番
參番
四番
藥種
白龍香
安産膏

大傳馬町
木綿店

長井
わたや

橋京橋新橋を経へ金杉橋の辺迄の惣名ゆゑ町幅十間餘あり

浮世小路　室町三丁目の南の東の横小路を云されと其故をきゝたる人云疊表浮世卧座商人ゝ也ともかゝる所ゆゑ又ハ風呂屋遊女の居うし

十軒店　本町と石町の間の大通をいふ　抱の佳節を待得てそ大理雛裸人形を道具屋軒端を並へうり　端午ハ冑人形菖蒲刀こゝふ市を立く　其賑ひをさ〳〵弥生の雛市よねとらす又年の暮よ至れハ春を迎ふる破魔弓手毬破胡板を商ふ共よ其市の繁昌言語よ述尽すへくもに実よ大平の美とも云んか

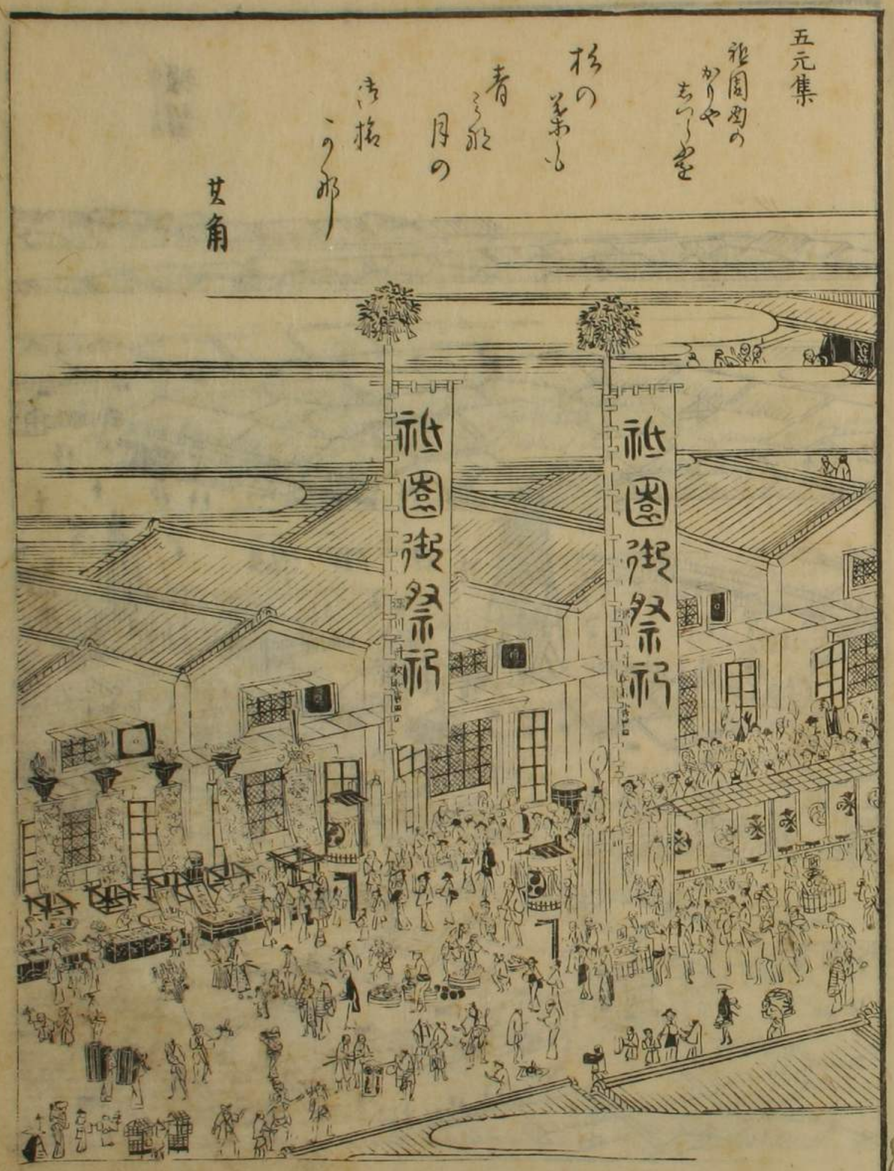
時鐘　石町三丁目の小路よひとも辻源七といふる者是を役す　此鐘其余都城の続有く候時を報ずる初ハ御城内よありしとなり　川町上野芝切通市谷八幡目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等なり

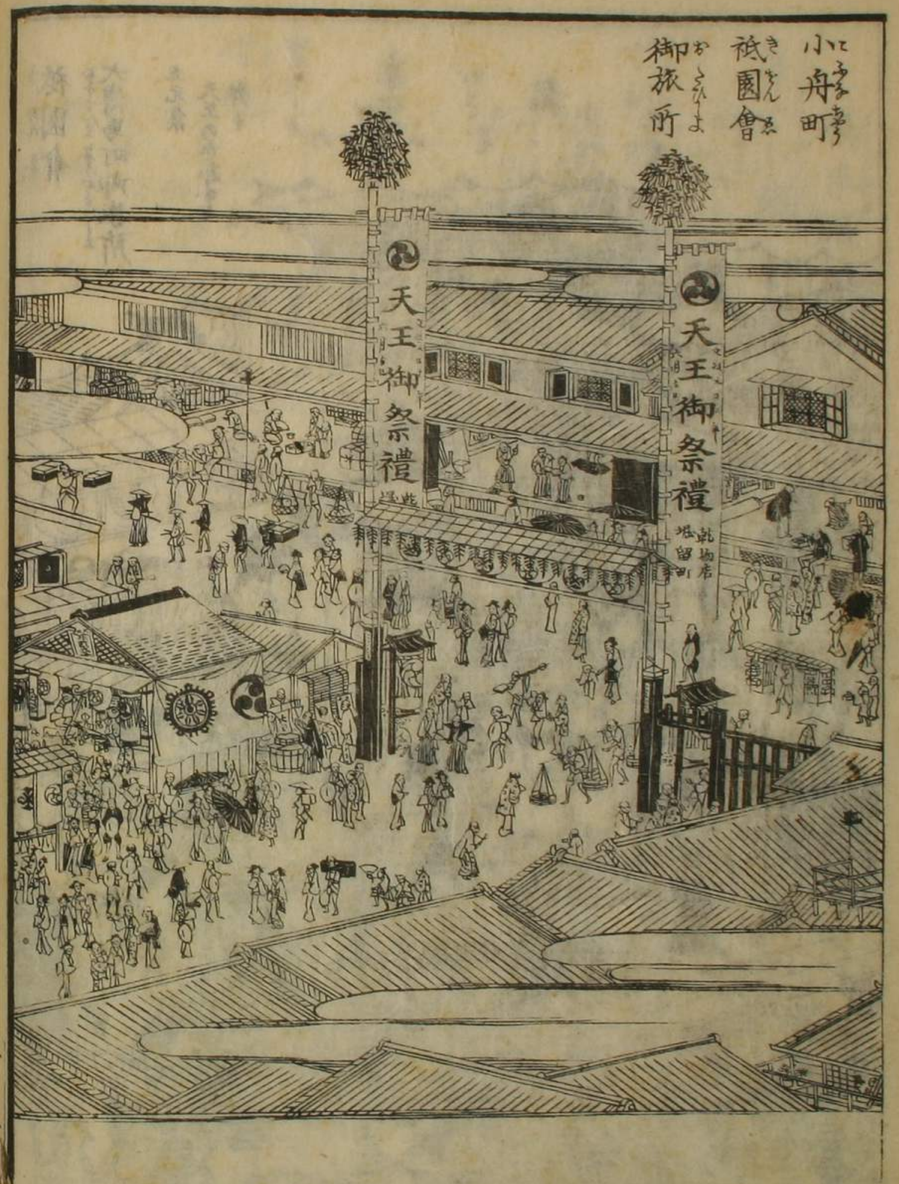
銘曰　宝永辛卯四月中浣鋳物御大工椎名伊豫藤原重休

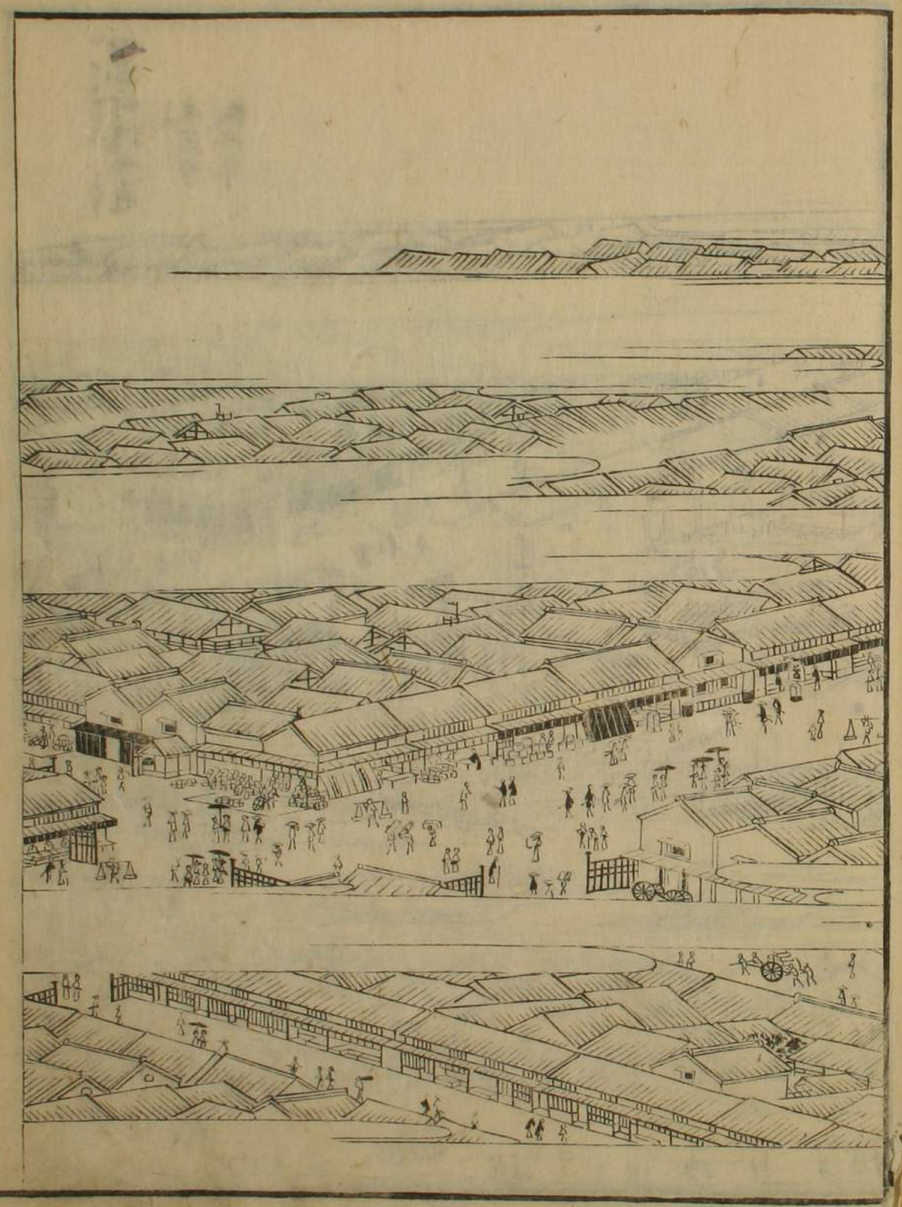
祇園会のかりやちまき

杉の葉も
青くなる
月の
清格
こゝ哉

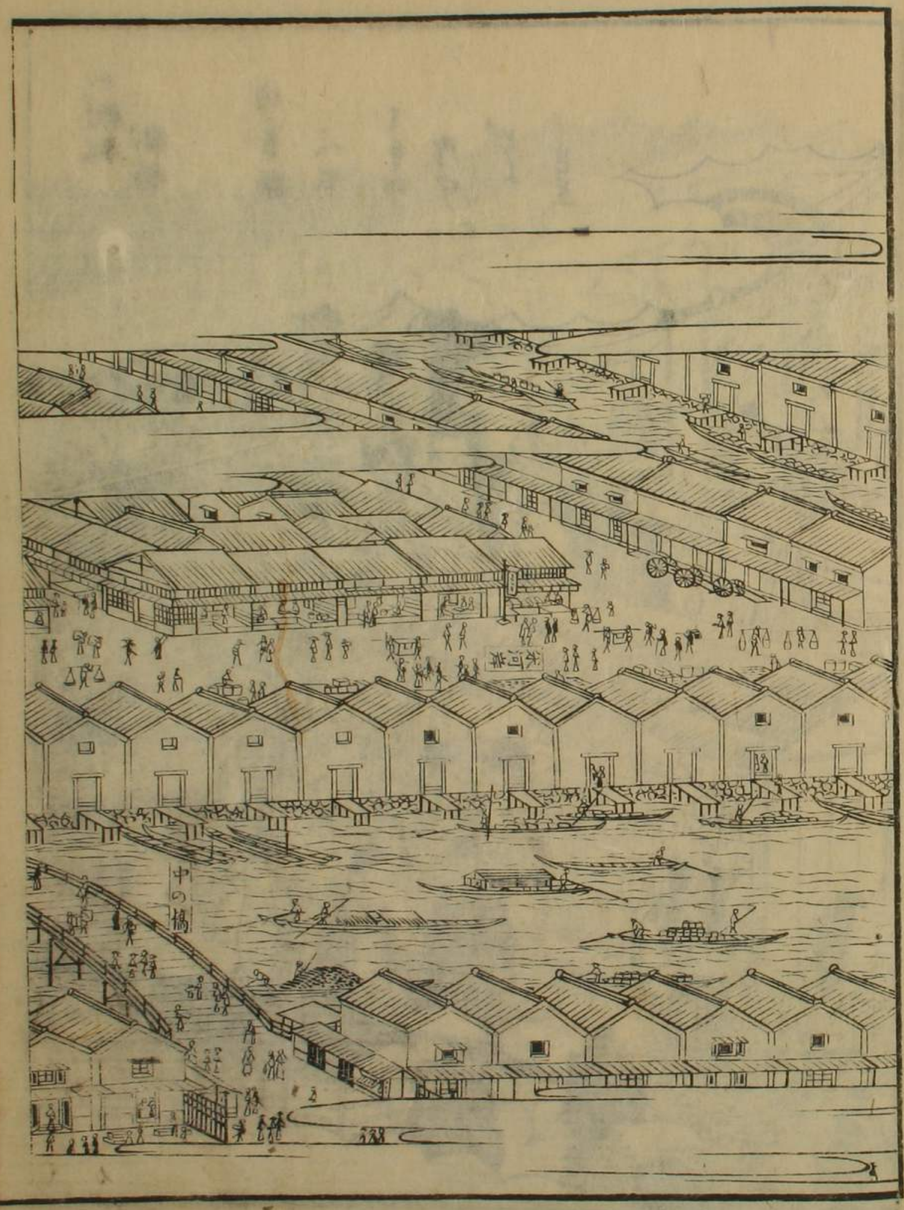
廿角

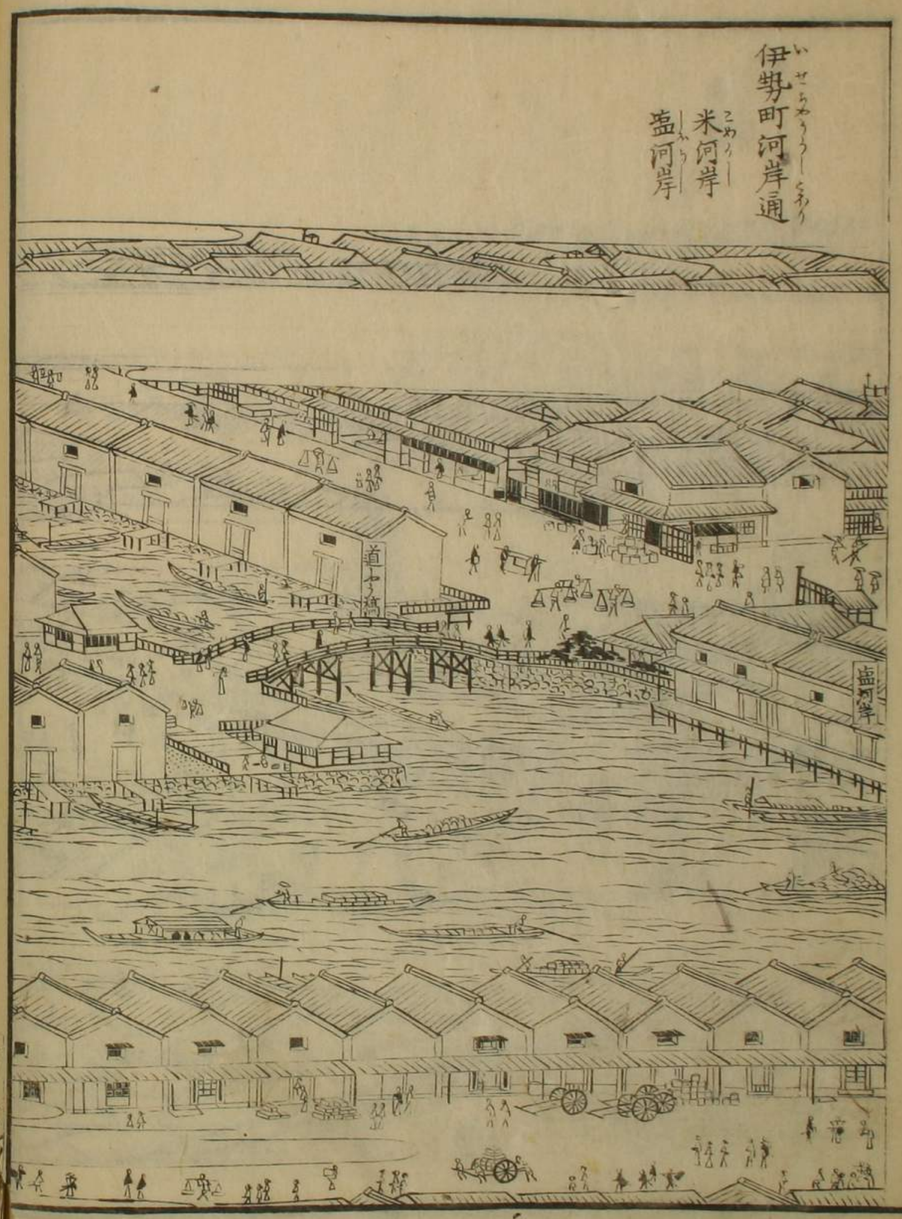






ろくとめ
堀留


米河岸
塩河岸
中の橋


伊勢町河岸通
米河岸
塩河岸

十軒店雛市

内裏雛
人形
玩具の
御守
ろうそく

按ニ宝永七年十二月十九日誓願寺前より出火ニ石町のあたり悉七ツ半頃此鐘ハ焼ふり一ハ翌ル宝永八年鋳直されしとぞ

福田村舊跡　本石町一二町の辺其舊跡なりと云

俗ニ大久保土水屋敷内ふ福田稲荷と称する宮居ありしが一頃の鎮守なり今本銀町一町目ふ白旗稲荷とそ三寶院流大壽院ものの宮ハ自別なり

千代田村舊跡　銕炮町のあたり昔の千代田村ありとぞ

千代田稲荷と称ふ小社あり相殿ふ諏訪明神を勧請す此地の里正宮辺某昔忍ヶ岡の麓より宅地ふ移りしとぞ一説ふ武人云此宮ハ寛正中太田道灌の旅千代田若狭守の勧請ありとされとも道灌ふ若狭守とのつる同胞あるよしを考へを又系図ふも此名ありとそ

本銀町封疆　明暦年間火災を除うしめんうふ是を禁しむ

今小伝馬町の裏の小路ふ号る町屋今ハ同所二丁目より大門通りの不近石垣の土手をもつて其形を残せり

あるハ此ふのりうつりしふや延宝八年の江戸並木を畫ふ栄の一本とつる冊子ふ一本松や六本松白銀町ふハ八丁ついまもつて武人云此宮ハ

今川橋　本銀町の大通より元乗物町へ渡橋を云此堀を神田堀と号く元禄四年辛未堀割らるゝを頃此地の里正を今川某と云ゆゑ今此橋詰の左右ふ陶器鄽ありと云なれハ直ふ橋の号ふ呼ぶると

又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を鄽菓子司大久保主水の宅ある故ふ号くと云り宅前ふ井あり主水井と云昔ハ御茶の水ありしゆゑ彼地を通らせらるゝ頃主水ふへつさ由仰ありしかハ下ふ養ふ

但その家の傳ふる處いつれやもつて大久保主水の宅を向せらるゝ又半井ト養ふ一首仕るとぞ

神田明神舊地　神田橋の内一橋御舘の中ふありしふ清き洗ふ

今猶存せりと

隔年九月十五日祭礼の時ハ神輿を此辺旧名を芝崎村と云小田原北条家の古文書ふ太田大膳亮所領の中ふ江戸芝崎一跡と云名を注せり

芝崎道場　其昔ハ浅草の日輪寺を往古諸國伊勢大神宮へ新稲を奉る故ふ國中ふ稲を植るの地ありしふ是を神田或ハ神田御田と唱へしとぞ

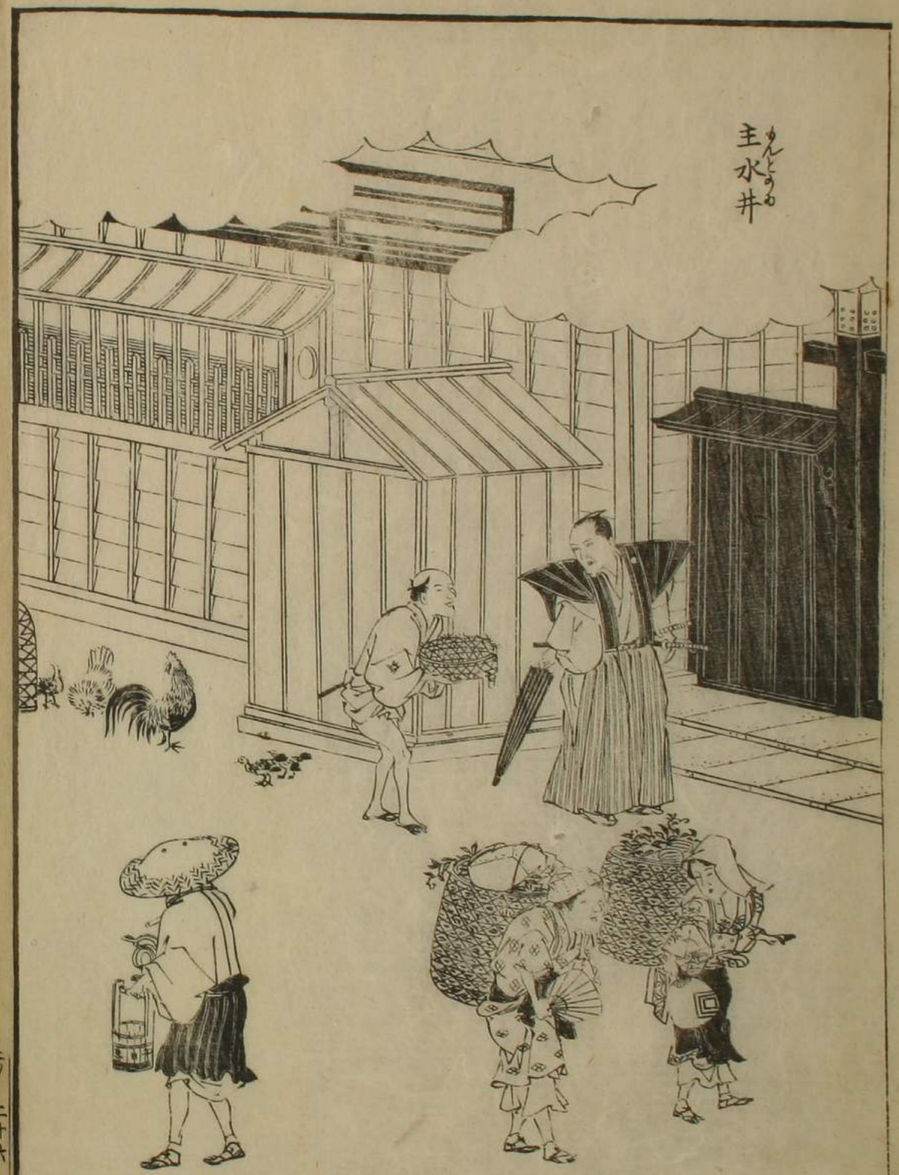
神田なり　故大巳貴命ハ五穀の神なれハとぞ此地ハ當國の

神田明神と号け奉りそ

神田橋　大手より神田への出口ふ柵を御門あり昔此地ふ土井大炊

今川橋

此辺瀬戸物屋多し



侯の弟宅あり〻故ゐ又大炊殿橋とも号くるとなり事跡合考ゐ云く昔ハ神田橋の外ゐ茅商人あまた住す今の八丁堀の茅場町是なり又寛文の頃ハこの外の町をもくく神田と号くなりと云く此御門北

護持院奮地　神田橋との間御溝の外の芝生を云此所ゐ

大塚護持院の奮址なり元禄年間柳原の南ゐありし知足院を引ろ、護持院と号られ殿堂御建立ありしゐ享保田録の後大塚の地へ移されし後明地とゐる林泉の形残〻くく頗る佳景なり夏秋の間ハ是を刑うせ〻ると都下の人こゝふ遊猟ありしゐ冬春の間ハ時として大将軍家こゝふ御遊猟ありゐ故ゐ此所を新駒ゐ原とも唱ゐるとなり世俗ハ護持院のゐと呼へり

筋ゐ淵　元飯田町の東の入堀

方の小溝ゐ架を石橋の号なり又小川町より九段坂へ向ふ和の橋を今魚板橋と唱ゐ又俎橋と作るされと一所以を志らず江戸名勝志ゐ此川を錦田川と云と志るせり世継稲荷ハ飯田町の中坂ゐ下の東文安の頃より此地に

鎮座ありしと云伝へ南向亭云く天正の始めまで御廓の結構出来さる
其頃ハ市谷長圓寺谷より大沼ありて今の揚場町昔ハ舩河原と云其舩河
原の辺をうの沼水流とく此入堀の所へ續きしとそ又小石川根本侯橋の下の水
流も三崎稲荷の辺より小川町を経て一橋より少し東南へ折て流るると云く
按ふに小川二筋迚流る地ハ今ハ小川町の号起こりて今私平
讃岐侯の南の方の小溝の石橋を油揭橋と唱へしも小石川の水流の
旧跡なりとぞ
関東古戦録 太田道灌江戸城ニありし頃眺望の和歌とそ
むさしのゝ小川のほとりを行すらも堤とそ思ふ
按ふに此詠風凋とのゝしてもろ〳〵よ挙く其
小川の清水と号るものハ小川町内藤大和守の庭中小森しく神田の湖とも云
り菊岡沾涼の説なり江戸名勝志ニ云く神田の湖ハ内藤大和守やしきの
内よりこゝを小川の清水と云なり即神田明神の御手洗と云ニ又按ふく
祝是混雑せしものなり

田安の墓 元飯田町九段坂の上田安御門の辺をいふ東南の方を
斜に見下して佳景の地なり此所ふ築土明神の舊地あり牛込
御門の内米倉家の所なる此構の前ニ大榎一株あり昔の神
木なりと云伝へ築土明神昔ハ此地ふありしく田安明神と称し

鎌倉町
豊島屋酒店
白酒を
商ふ
図

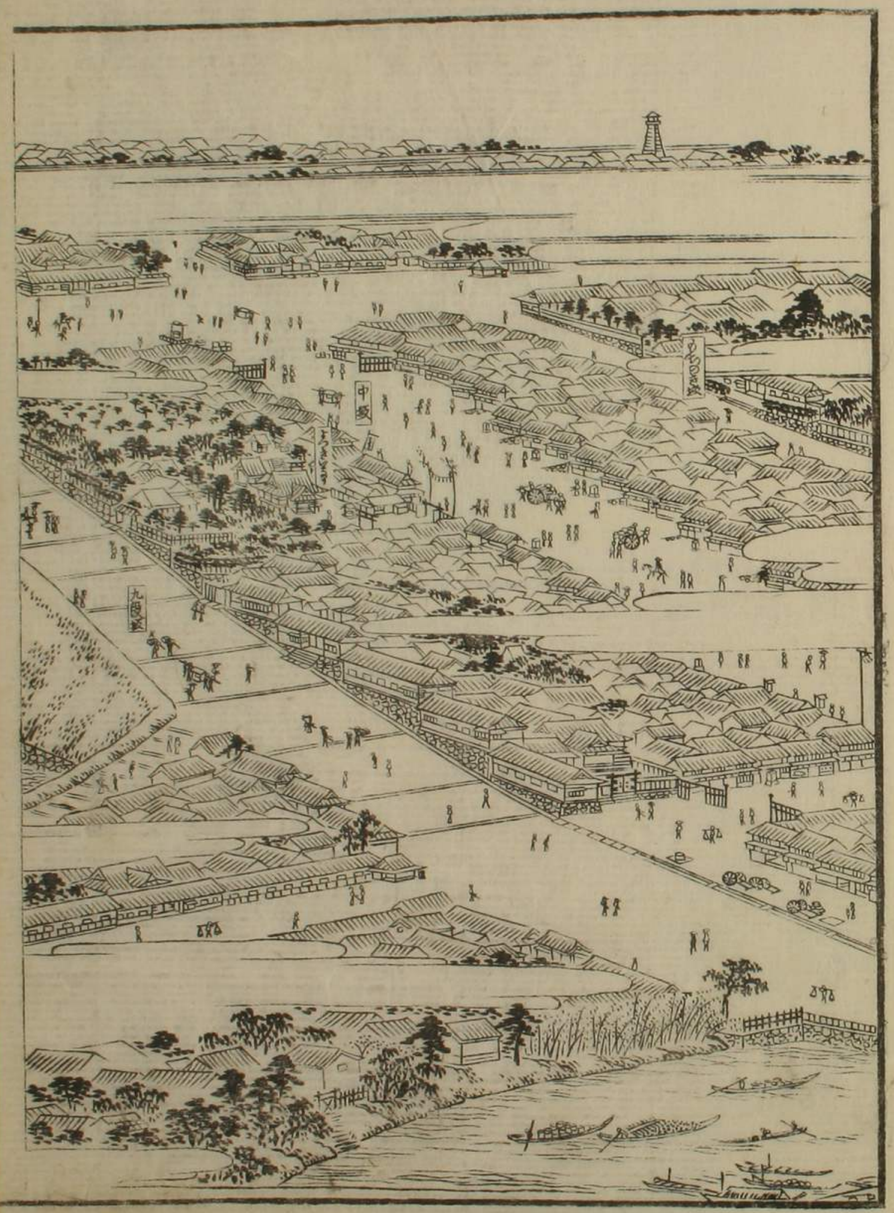
例年二月の末藤倉町
豊島屋の酒店ふ
て雛祭の白酒
を商ふ是ぜんと
して遠近の貴
賤群集て市を
なして賑ふ

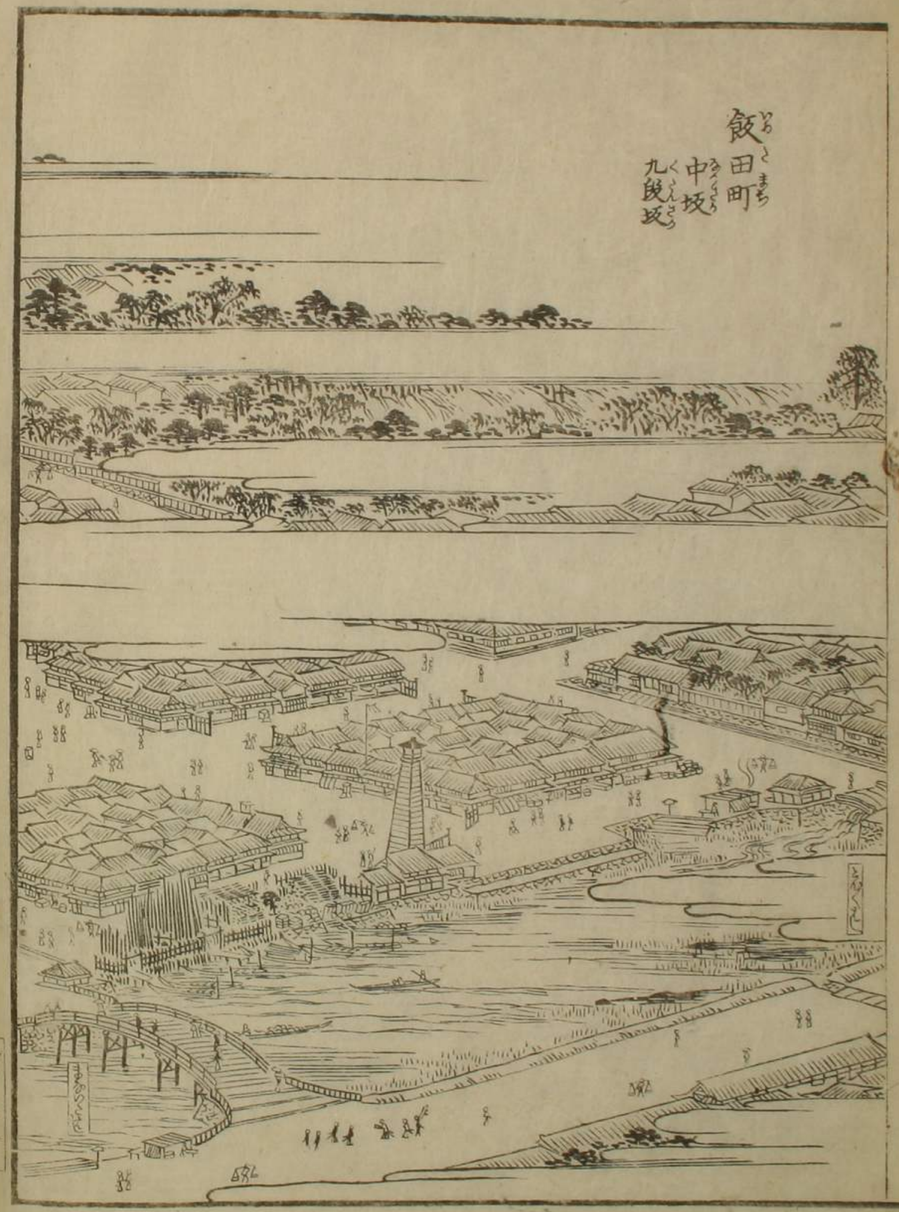
護持院原

二番原

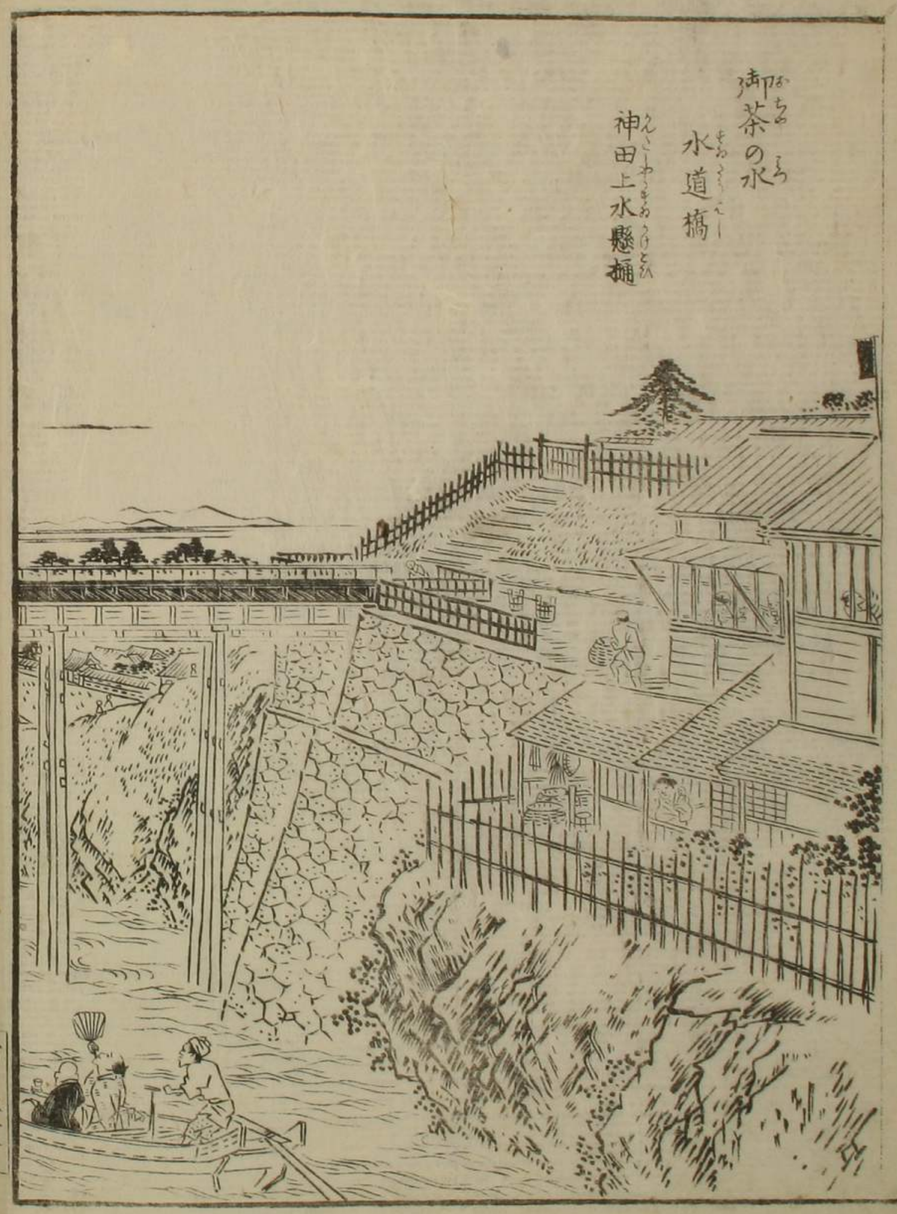
三番原

四番原

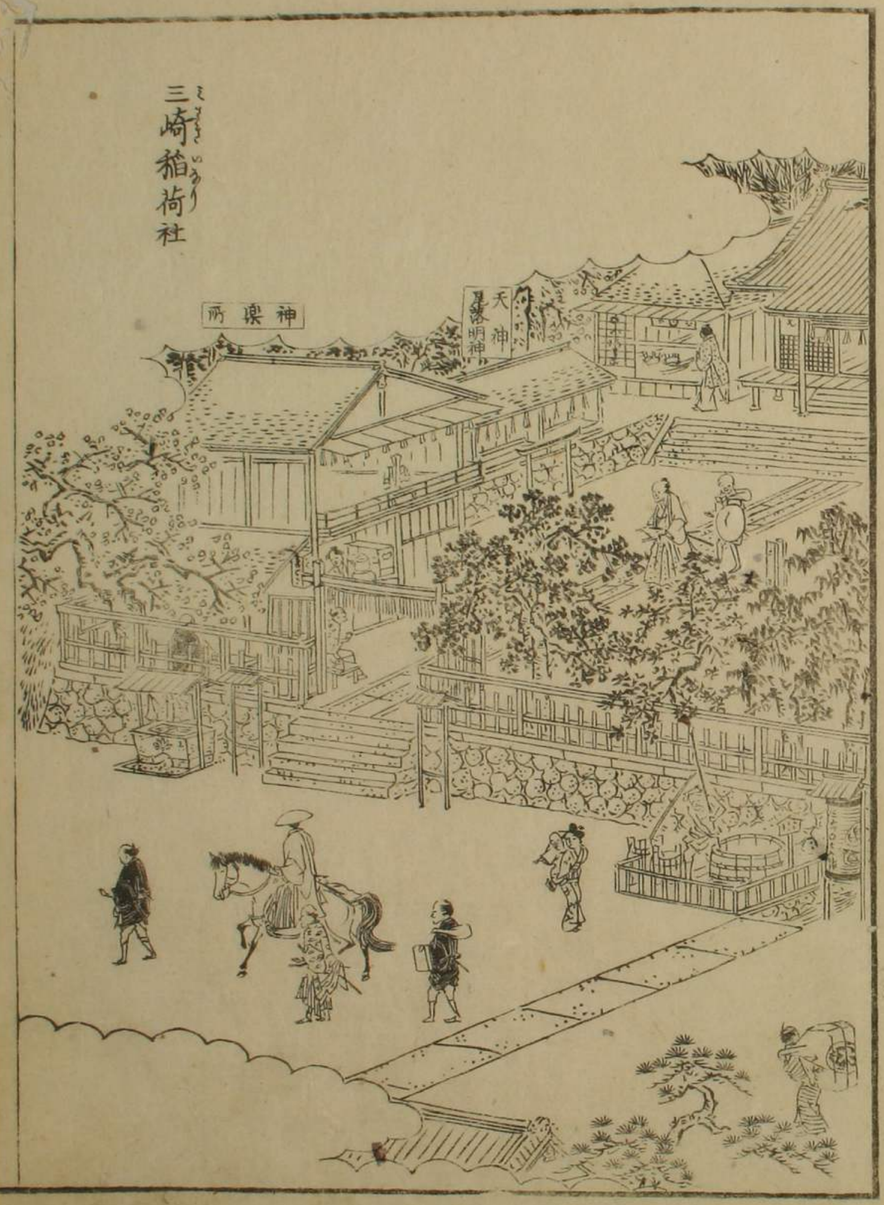

中坂


飯田町
中坂
九段坂

水道橋


御茶の水
水道橋
神田上水懸樋

三崎稲荷社



なるとなり

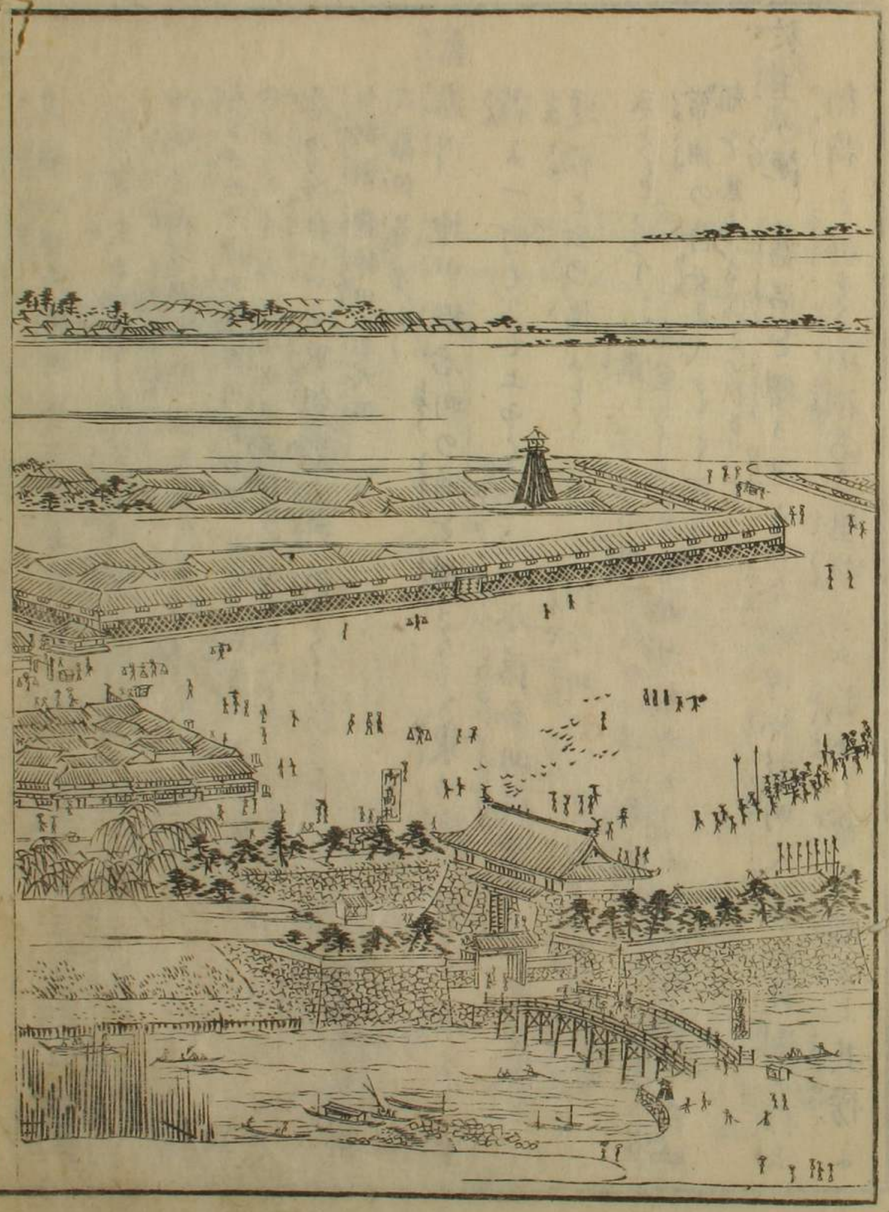
水道橋　小川町より小石川への出口神田川の流を架せし橋の名下の方ゟ神田上水の懸樋あり故よ号とす　北下の川ハ万治の頃仙臺侯釣命を奉りて堀割らるゝ萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地よりありしと云此橋の舊名を吉祥寺橋ともいつゝ三崎稲荷ハ同し西の方土堤よ傍てあり此社ハ二古社記云當社ハ二古の勧請ゆゑ年代不詳近くハ天文七年小田原北条氏綱造營ゝりと又云此地ハ昔三崎村といひしを因く三崎と称す

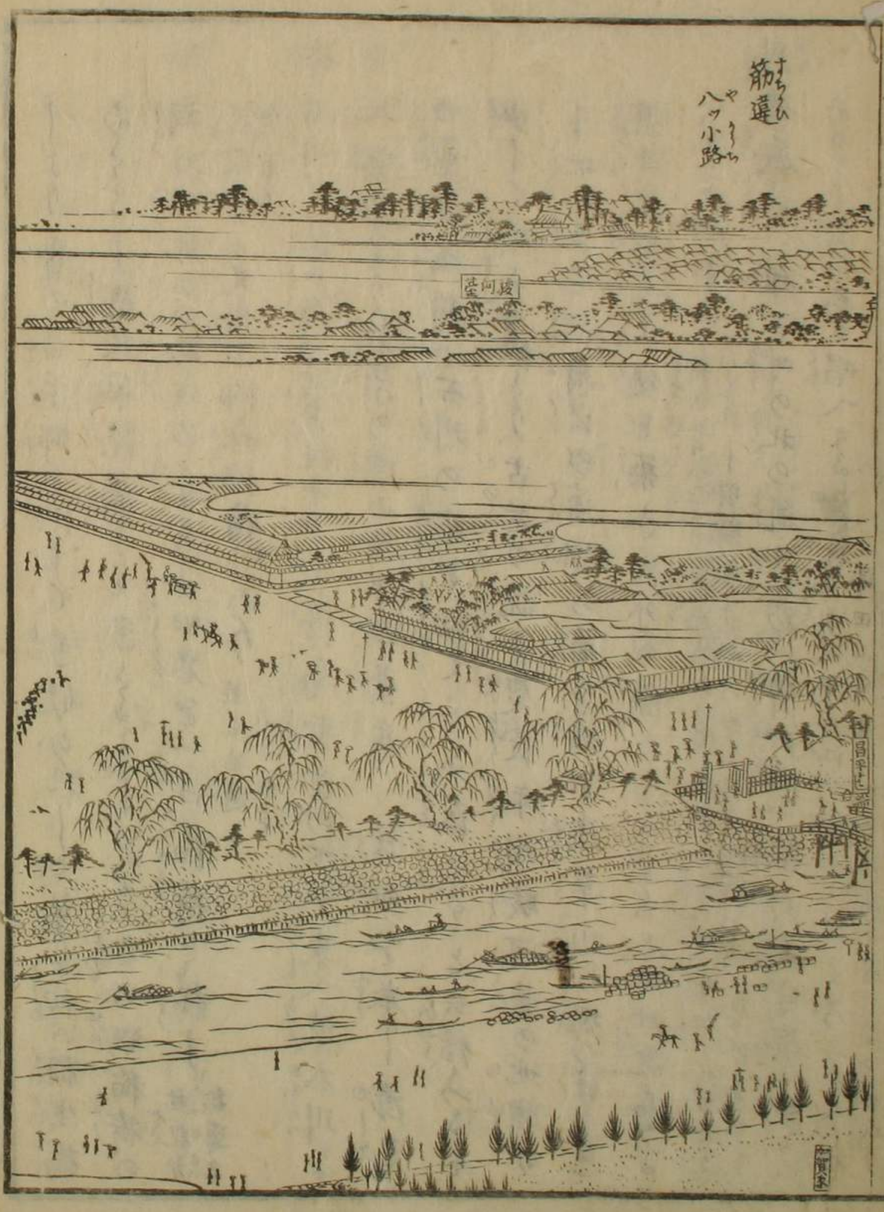
駿河臺　昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むよ掌上に視るゟ如し故ゟ此名ありといふ證とし

筋違橋　須田町より下谷への出口ゆゑく神田川よ架せる此所ゆゑ御門ありそ此前の大路を八ッ小路の辻と字す昌平橋ハ是より西の方ゟ並ゟ湯島の地ゟ聖堂御造營あるより魯の昌平郷よ比しそ号けられしとなり初ハ相生橋あゝゝ一橋又芋洗橋とも号くるよしゝり太田姫稲荷の祠ハ此地淤路坂の上ゟあり旧名を一口稲荷と称す　社記を拾遺名所圖會ゟ又東ゟ柳森稲荷社あり　並よ拾遺よこれを載も詳なり

神田川　江戸川の下流ゆゑく湯島聖堂の下を東へ流大川よ入明暦より万治の頃ゟ至て仙臺侯台命を奉り湯島の臺を堀割小石川の水を初てこゝゟ落さるゝと云伝ふるも少しく誤るゟ似たり古老の説ゟ慶長年間駿河臺の地開けし時ゟ至て水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけしと其土を以く土堤を築き内外の隔とせしよ似たり　按ゟ昔ハ舟の通路なりしを仙臺侯命をうけたまはれし頃堀ひ今のやく舟の通路を開けるとぞ

丹後殿前　雉子町の北の通りをいふ昔此地ゟ堀丹後守殿の第宅ありしよ依ゟ号ふ寛永九年の江戸繪圖よ因く芳ゟ今それ津田山州侯の地則堀家のやしきの跡なり




筋違
八ッ小路
橋田川

藍染川

其頃此辺の風呂屋ハ湯女を置て客を招しより又六法組と
て武夫やもあゝぬ壮年の俠夫大小立髪の異風ある出立ゐて
此風呂屋の辺を徘徊せゝハ是を丹前六法風と呼ぶ（丹前ハ丹後屋敷前の略語なり）
今も此地ハ清水屋堀川抹云湯屋あり則昔の湯女風呂と称へゝりしとぞ
ゆゝしく狂言ハ取組名も丹前とよびるとぞ

藍染川　神田鍛冶町の通を横さゝく東の方へ流る溝あり里
諺ニ一町もそも上ゆく南北の水落合此所ゆく會流る故ニ
逢初と云の儀よとるに云又俎屋町の辺を流る故ニ藍染川と
云とぞ（此溝の端鍛冶町の裏の小路ニ銀善院竜宝庵室あり本尊を煩悩菩提の真言ゐ
常泓の侍女ニ代ゝく自ら頬を焦しゐひあゝハせり）

於玉ゝ池　舊名を櫻ゝ池と云今神田松枝町人家の後園ニ於玉
稲荷と称する小祠あり里諺ニ云於玉ゝ霊を鎮ると其傍ニ

（芥蘆俎　鏡榊俎　唐犬俎　白柄俎　鶺鴒俎　神流俎）

おうまがいけの古事

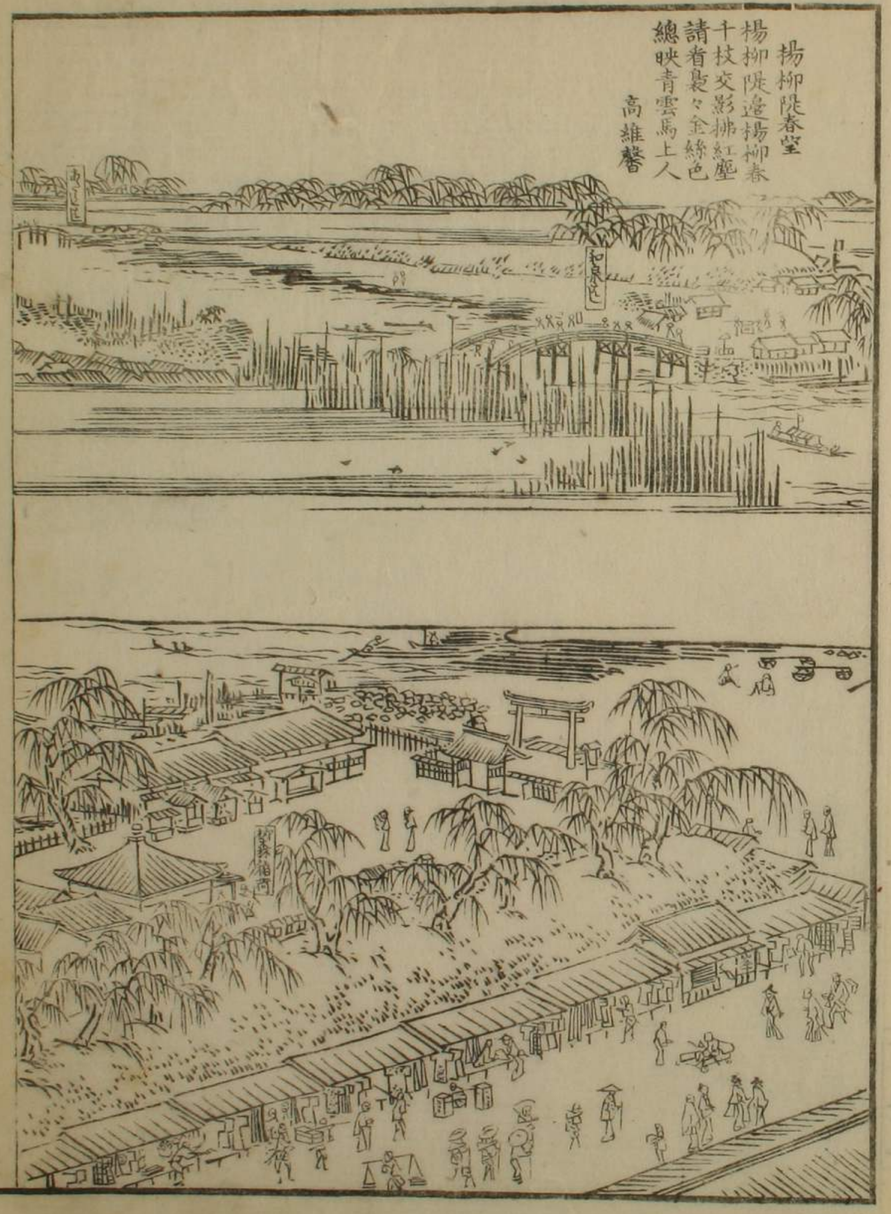
小しく井のもき形残もり昔の池の余波なりとのべ往古を大概なる也なりしも江戸の繁昌よもをろひ里老傳云昔此地ハ奥州への通路ゆく櫻樹あまた侍りける而よりて池なる名ふ櫻ヶ池とよべりとそ其傍の櫻樹のもとふる玉とのべる女幽居く往来の人ゟ茶をもとむ容色大ようくさまある男二人ゟ品形も如斯なりきとなん中頃人うつりて彼女よ心を通ハせるされハ切なる方もを思へとも叶ハぬ事ゟまゝありけれハ我身のうへを思ひあつらひく女ハ終ゟ此池よ身を投くむなしくなりぬさるゟ津の國の求塚の古事ゟ似くともあそれるまゝとくく里民打寄くく七殿我池辺よ埋みをるしるとくく柵を植くく記念の柳とハ号ると云くその其蹟址明暦の画録よとひぬるとそ今ハ名のミを存せりこの弁慶ふ如何なる池とそ呼ぶハせりとなん

辨慶橋　同所東の方和泉橋の通藍染川の下流ゟ架す其始

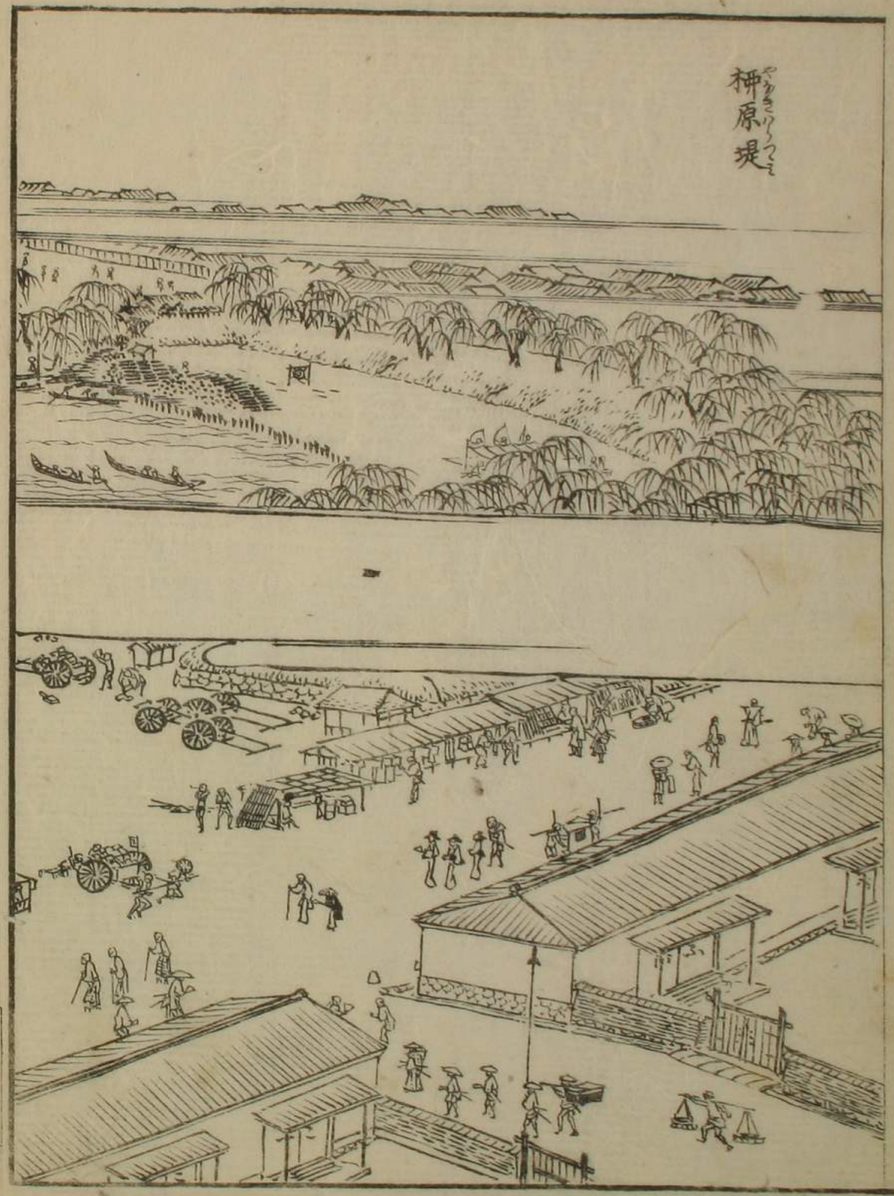
楊柳隄春望

楊柳隄邊楊柳春
千枝交影拂紅塵
請看數々金絲色
總映青雲馬上人

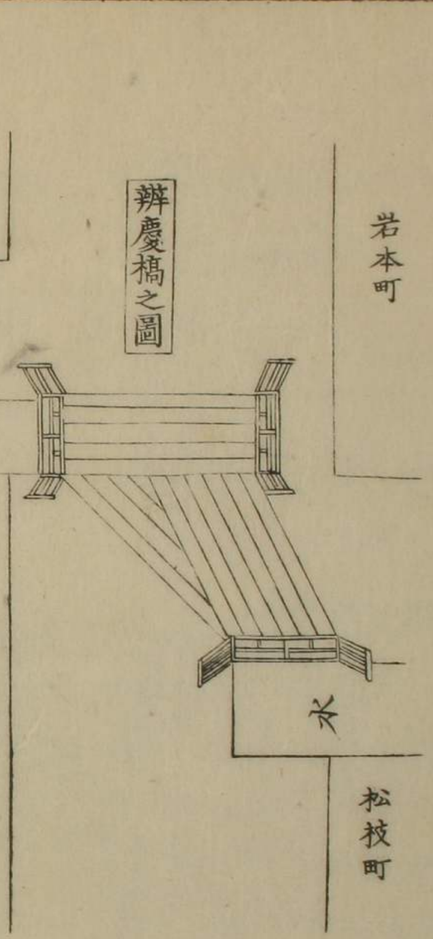
高雄磬



柳原堤

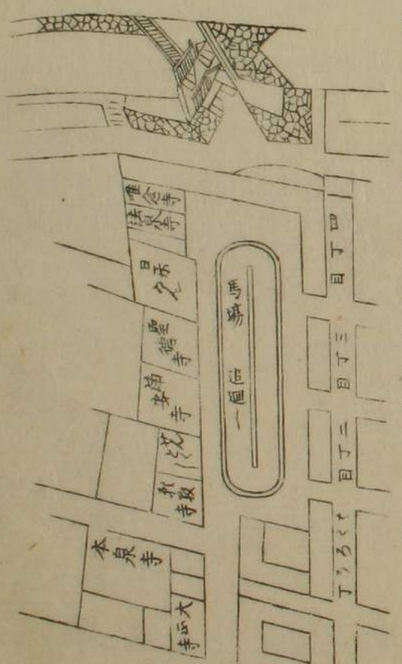


改大工棟梁辨慶小左衛と云る人の工夫よりく懸初しと
云此地の形ち應しく襷を横切く筋昏よかる尤奇なり



柳原封壇　筋違橋より浅草橋へ續く其間長凡十町許あり
享保年間此所の堤ふ悉く柳を栽させらる　寛永十二年の江戸繪圖
堤の外ハ神田川なを又此堤の下ふ柳森稲荷と称する叢祠あり

故よ此地を稲荷河岸と呼へり　昔ハ神田川の隅もく此川の南北そふ
馬場　馬喰町三丁目の西北の裏通よあり　江戸馬場の中最も古し
慶長五年関ヶ原御陣の時洗馬備ありし所なりと云伝ふ
御馬工郎高木源兵衛是を預りもる　此地を馬喰町とよも此内由緒よりて
寛永年間拠のあつまめりとも草紙よ永ハ馬喰町とも侍あるやなり　昔ハ冨田半七と高木源兵衛と両人
なりしとそ寛永十年閏拠のあつまめりとも草紙よ永ハ馬喰町とも侍あるやなり　云々頃ハ
追廻しとものひく左のあき形あるしとなり　寛永明暦延宝なるの江戸繪圖よもとも頃ハ
八月毛鹿毛



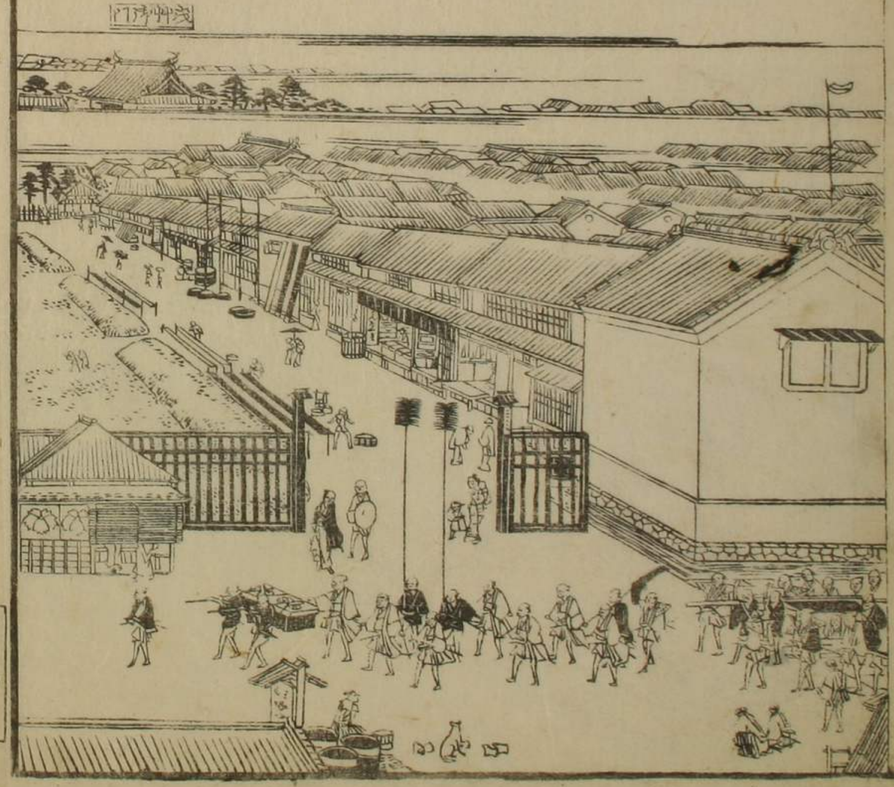
浅草橋　神田川の下流浅草御門の入口よ架せ此所よも御高札を建

馬喰町馬場

鶴岡放生會職人奇合

博労戀

あへく
世の
くふもまれの
あくび哉
つけまひ
こそ



よしかう
それ
良基

錦繪

江戸の名産にて
他邦ふ比類なき
由申極彩色珠
更ニ美のみ樂
ひやもありて諸國
ふ賞美せらるゝ
駄ー

茶研堀
不動
金毘羅
歡喜天

らる馬喰町より浅草への出口やゝく千住への官道なり此東の大川口よりかくるを柳橋と号く柳原堤の末よりあふ名ともるとそ
両國橋　浅草川の末吉川町と本所元町の間よ架ル長九十六間（橋の前後に番屋を幷橋上よ番屋を置く是を守らしむ）寛文元年辛丑新よ両國橋を架しられしと云く書名を大橋と号く事跡合考よ万治二年東の大川筋よ始て大橋一ケ所をかけらるゝとあるも此橋のことなり又或人云く貞享三年丙寅春三月利根川の西を割く武蔵國よ属せらるゝと云ふより此橋を大橋とゝなへ事跡合考ゟ云此橋の形ハ扇を開きたるかことくつる草帝始も八月廿八日よ終る常よ賑ハしきものゝ就中夏月の間ハ尤盛なり陸ゟも観場不せきを計ふしく其招牌の幟ハ風よ飄く偏飛ゝり西岸の飛楼高閣ハ大江よ臨ミ茶亭の床几ハ水辺に立

其昔此川を國界と定めらるゝより両國橋の号ありといふことを今ゝ
めく利根川を以界と定めらるゝより後ハ本所の地も同しく武蔵
國よ属せるものゝゆへ橋の号ハ唱へ来るよ任せく改らるゝすと
なりの西を割く武蔵國よ属せらるゝと云
始も八月廿八日よ終る常よ賑ハしきものゝ就中夏月の間ハ尤
盛なり陸ゟも観場不せきを計ふしく其招牌の幟ハ風よ飄く
偏飛ゝり西岸の飛楼高閣ハ大江よ臨ミ茶亭の床几ハ水辺に立